

---

# 神々の御剣

神聖龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神々の御剣

### 【Nコード】

N1494A

### 【作者名】

神聖龍

### 【あらすじ】

神々が作ったといわれる【神の御剣】。政府がやりたい放題する世界でこの伝説の剣が覚醒を始める。この物語の主人公【春日煉次<sup>かすがれんじ</sup>】もその覚醒者の一人となり宇宙を駆ける・・・かもしれません^^;(曖昧)

## プロローグ

その昔地球には様々な伝説の剣があった。

そしてその剣が使える者は巨人が操れると言われていた。  
それゆえ神々の作った剣【神の御剣】と言われていた。

時は流れ人々は火星や月への移住がほぼ完了した  
そして同時に宇宙の探索をするようになった・・・  
しかしそれは資源が増え争いが絶えることなく続いた。

その結果政府は衰退を辿り壊滅を向かえた・・・

それから長い時が流れた。

宇宙のアチコチで争いが起き

その度に被害者が増えつづけた。

しかし、いつの時代でも救世主はいた。

とある男が一振りの刀をもっていた。

その刀は神の御剣らしく男は争いを止め高々と宣言した。

「我はここに新たな王となり政府を作りより良い国を作る」

と男は言った。

男の本当の名はもう闇の中だが人々は神話で出た人物【オーディン】  
と読んだ・・・

新たな政府は治安を守るため神の御剣の巨人に似た人型の兵器を作  
った。

そして神の御剣から現れた巨人を【刀神機】  
その刀神機を元に作られた兵器を【刀機】  
と呼ぶようになった。

最初の頃は宣言通り良い国へ向かっていた・・・  
が、王が4代目になった時その宣言は崩れた。

王は我俣で税金をあげてはやりたい放題していた  
もちろん反乱も起き世界はまた争いが絶えない世界となった。

銀河歴540年

まだ争いの絶えない中人々は神の御剣を次々と発見し覚醒するよう  
になった・・・

この物語の主人公もこの覚醒者の1人になる・・・

## 第1部：第1話：『覚醒』（前書き）

ブログで書き忘れてました^^;（前書き）。という事でこちらで挨拶を。SFは初挑戦ですが諦めることなくがんばって行きたいと思います^^

## 第1部：第1話：『覚醒』

カチ・・・  
ジリリリリ・・・  
カチン・・・

俺はもともと布団からだるそうに起きた。

俺はカーテンを開け朝日を眩しそうに見る

俺がまだ眠そうにボーっとしていると扉から聞き覚えのある女性の  
声がある

『おい煉次』

まだ寝てんの？学校遅れるよ』

俺「ああすまん  
今から行く」

俺の名前は春日<sup>かすが</sup> 煉次<sup>れんじ</sup>だ。

ちなみに、今話し掛けてきた女は俺の幼馴染の大野<sup>おおの</sup> 美奈子<sup>みなこ</sup>  
俺達は名前こそ地球の日本人のような名前だがここは火星の  
第2日本と言われている所だ。

俺の家は2階立てで俺の部屋が2階にあるので1階の美奈子のいる  
部屋に向かった。

俺達はいつものように朝食を食べながらテレビを見ている  
え？なんで両親じゃなくて美奈子と食べてるか？ってそれは俺の両  
親と美奈子の両親は

偉い科学者でいつもいないので俺と美奈子はいつも2人で食べてい  
た。

話を戻してニュースを見ているとまた政府が治安直しという名目で  
村を破壊しているニュースが流れていた。

しかし、こんな事は俺達にとってはどこか遠い事でおきた事としか取る事が出来ずに

俺「また我侭な王の暇つぶしかよ」

美奈子「仕方ないわよ昔の王はいい人だった様だけど時代も終わりかな？」

と第三者となり政府の文句をただ言うだけだ・・・

そして俺と美奈子は学校でいつものように

ちなみに俺達は地球年（地球での年齢）でいうと17

高校2年生だ。

退屈な授業を受け

昼食を取り

午後の授業は寝て過ごすつもりだった・・・

しかし、そんな平凡は2時間目の途中で崩れた

ウウウ~~~~・・・

というサイレンが突然鳴り出し

皆が避難し始めた。

状況が掴めないまま避難をしていると

突然爆風に襲われ皆吹き飛ばされた。

俺はとっさに美奈子をかばいなんとか助かったが・・・

目の前には地獄のような光景が広がっていた。

さっきまでとは全然違うまるで戦争の後の町のような風景

痛さのあまりに泣く者

大切な者を失ったために泣く者

あまりの突然な事で混乱している者

絶望している者と先ほどもで平和だった町とは思えないほどの変わり様

そして・・・その炎の中にいる刀機が数体

俺は友の死に直面し

政府を恨みながらも泣く事しかできない自分が情けなくて仕方がなかった。

その時俺の頭に（力がほしいのならば此处へ）と声が聞こえた。

俺はその声に導かれるまま町の外れにある立ち入りが禁止の洞窟へ入った・・・

美奈子も心配そうについてくる

そしてその洞窟の奥には一本の刀が刺さっていた。

美奈子が横で必死に俺を掴み何か言っているが俺にはまったく聞こえない

ただ俺は導かれるまま刀を掴みそのまま抜いた。

すんなり刀は抜けたが刀身は錆びておりとても使えるような物ではない

だけど俺はこの刀を知っている不思議な感覚に囚われた。

刀は不思議と俺の手に馴染み

まるで体の一部のように軽かった。

そして頭にまた声が聞こえた・・・

（刀の名前を・・・）

俺は自然と出てきた言葉を口にした。

『血龍刀』

そう言うのと突然次元が歪み巨大なロボットが現れた。

そして俺は刀を地面へ刺すと魔方陣のような物が広がり何処かへ瞬間的にワープした。

近くにいた美奈子も一緒にワープしたようだ

周りには何もなかった一面白かった。

すると突然機械的な女性の声が聞こえた

『血龍刀 起動 全プログラムを初期化・・・

初期化完了 搭乗者確認』

というと俺の周りを何か小さな機械が現れたしばらくして

『登録完了　DNA認証登録　ネットワークより登録者を春日煉次と認証』

となんだか次々と登録や認証などの言葉を繰り返した。

しばらくすると静かになり女性の声が聞こえた

「あなたが私の新たなマスターですね？」

と目の前に突然全裸のかなり美人な女性が現れた。

俺「え？あ・・・はい

そうなります」

と突然素に戻り正直鼻血が出そうになっていた。

「私の名前は桜さくら

これからあなたのパートナーとなりあなたを援護する者です」

と自己紹介を受けた。

そして俺は当初の目的を思い出した。

俺「それだったら俺の力を貸してくれ！

あいつらを・・・政府の奴らを退ける力を」

桜「マスターの望みならそれに従うだけです」

そう言われると白しかなかった風景が突然崩壊した町を上から見ているような風景になった。

風景というより周り全てが風景になり俺が浮いているような感覚だった。

すると頭の中に桜の声が聞こえた

「この巨人はマスター自身あなたが動くところの巨人も動きます」

そう言われて俺は右足を前出したすると風景が動き出す

俺はなるほどと理解した。

俺の手にはさつきまで錆びだらけだったのに

今では銀色のきり味が鋭そうな刀があった・・・

俺はそれを構え戦う準備をした・・・

第1部：第2話：『決意』（前書き）

今回の小説は1話1話が長いです（今の所両方千五百文字越えてます^^；

## 第1部：第2話：『決意』

政府の男「副隊長は作戦実行しないのですか？」

？「俺はこういう仕事は好きじゃないんでな

お前達の好きにしろ」

副隊長と言われる男の名はいぬがみ きょうすけ犬神恭介

黒髪をオールバックにし右眼に眼帯をしている政府の男だが最近政府のやり方に疑問をもっている

犬神「ツチ・・・最近おかしくなってきたな」

とぼやくと

？「けど犬ツチはそれに従ってるじゃん」

と声がする。

この声の元は桜と同じでこの機体のオペレーター

そう犬神が乗っているこの機体は『刀神機』なのだ。

犬神「うるせえな

流銀隊長の命令なんだから仕方ないだろ？シャルン」

と言ったどうやらオペレーターの名前は『シャルン』と言っらしいしばらくすると突然

ガクン・・・

と機体が傾いたそれと同時に

シャルン「痛い」

とシャルンが痛がる。

犬神「何！攻撃だと！」

と言うとシャルンが

シャルン「足やられちゃったよ

ブースターも足のせいで出せないから事実上行動不可だよ」

と情けない声が響く

犬神「なんだと！仕方ねえな誰にやられた」

とモニターを見ると紅い機体が在った。

機体の色とは正反対に白い刀が際立つ

いつの間にか刀機は全てやられていて

犬神「俺だけかよ・・・」

シャルン！通信いけるか？」

と聞くと『いけるよ』と返事をし通信を送る

犬神「こちら12番隊副隊長犬神恭介

俺はもう何もしないだから顔を見せてくれ

もう一度繰り返し返す俺は何もしないだから顔を見せてくれ」

と通信を送った。

俺が敵と思う物を潰していると突然顔が現れた。

そして、顔を見せてくれと言われたので

俺「桜、俺もこんな事できるか？」

と言うと

桜「できますよ」

と言われたので俺は「頼む」と言った。

俺「俺の名前は春日 煉次だ」

と通信を送ると

犬神「制服？！まあなんでもいいとりあえずこの巨人を直すぞ」

と犬神という人の巨人が光と共に消えた。

俺も桜に『俺の方も直してくれ』

と言うと光に包まれいつの間にか地上にいた。

すると目の前にはさっきの犬神って人と白い髪的小学生ほどの子供がいた。

犬神「こいつはシャルン俺の相棒だ」

と紹介された。

犬神が見るとさつきモニターに写った春日 煉次と名乗る黒髪に黒い瞳に制服とマジメそうな青年  
と同じく黒色の長髪と黒い瞳の全裸の女性  
と後ろに制服姿の金髪の女の子  
の三人が目の前にあられた・・・

犬神「ん・・・？」

とよく見ると

犬神「全裸?!」

と大声を出され俺は桜が何も着ていない事に気がついた。  
俺は急いでブレザーを脱ぎ着せようとする

桜「いえ大丈夫です」

と言つて桜が光に包まれると着物姿の桜が現れた。  
なんだか桜に着物はよく似合っており見惚れていると

犬神「んん！」

と咳払いをされてそつちを見た。

犬神「でそつちのお嬢さんは？」

と言われて美奈子を見た。

そして

俺「こつちは美奈子

俺の幼馴染です」

と言われて美奈子が出てくる

美奈子「えつと・・・大野 美奈子です」

とまだ状況をあまり読み取れないらしく

戸惑いながら自己紹介をした。

犬神「さてと俺は一応政府の人間なんだが  
丁度今の政府に疑問を感じていたんだ  
でもってお前達は反乱を起こすんだろ？」  
と聞くと

俺「そんなつもりはありません

ただ・・・この町を襲われて俺の大切な人達を突然奪っていったあなた達を止めたかっただけです」

と言うと

犬神「確かにな・・・だが俺もそういう命令を受けてるんだ疑問に思っけていてもしなくてはいけない」

と反論する犬神

俺「じゃあ！命令なら人をそんな簡単に殺していいのかよ！

そんなのおかしいじゃねえかよ！」

と言うと犬神は俯き

犬神「確かにな・・・すまん」

と謝るとシャルンが

シャルン「待つてよ！犬ツチは今回の作戦参加してないのに何で謝らないといけないわけ？」

と弁護をする。

俺はその事に驚いた。

俺「え？あんた・・・何も？」

犬神「ああ・・・さっきも言っただけど俺も今の政府のやり方には疑問を持つてるんだ

どうだ？一緒に行かないか？どうせこのまま政府を見ているも今回のような事が起きるだろうからな

止めるなら政府を正すか潰すしかないぞ」

と言われて俺は

俺「俺は今まで他の町とかで何が起きても他人事みたいな事しか言ってなかったけど

今回の事でこんな事は止めるべきだと思っただ・・・

だからアンタに言われてじゃない！俺は自分の意思でいくんだ！」

と言うと犬神は「ハイハイ」と言っけて歩きだした。

俺と桜は走って追いかけて美奈子も来たが

俺「美奈子はここに残れ母さん達から連絡があるかもしれないから

もし何かあつたら俺の携帯に連絡しろいいな？」  
と言って俺は美奈子を町に置いて町を出た。

### 第1部：第3話：『修行』

俺は犬神の後ろを歩いていて気がついた俺「なんでその女の子背負ってるんだ？」

と聞くと

犬神「お前が足を切ったからだろ？」

ってお前まさかそこから知らないのか？」

と呆れていた。

とりあえず俺は女の子に近づき

俺「えつと シャルンちゃんだっけ？」

ごめんな」

と謝ったすると

シャルン「戦いだから仕方ないけどシャルンの事子供扱いしないで今度からはちゃんと『シャルン』って呼んでよ？」

と笑顔で許された。

そして犬神に

犬神「巨人っていうのは自分自身と分かってるはずだと言う事はもちろん痛覚もあるんだよ

だけどオペレーターはそれを肩代わりしてくれるんだ

いつもはかすり傷程度なんだがあまりにも大きいとこんな感じに深めの傷になる」

俺はそう説明を受けて

俺「じゃあ俺が操縦ヘタだったら」

聞くと

犬神「もちろん桜ちゃんは傷だらけになるな」

と言われた俺はすぐに

俺「じゃあ俺を強くしてくれ！」

と言うと

犬神「俺も一応副隊長って言われてた男だ厳しいぞ」

と言われたが俺は『お願いします!』  
と元気に言った。

それから半年俺は巨人の基礎的な事から戦いの基礎まで全てを教わった。

巨人には属性がありその巨人特有の技などがあることや  
巨人を思い通りに動かすにはオペレーターと仲良くすることや  
戦い方やサバイバルの知識など色々な事を教わった。

今日も俺は犬神と実戦訓練をしていた。

実戦とはいえ巨人ではなく生身での戦いだ

犬神「まだ甘い!」

と俺は刀の刃のない方で思いっきり吹っ飛ばされた。

犬神「ちよつと休憩だ」

と言われ俺は木陰で横になる

俺「ゴホツカハ・・・ペツ」

と口の中の血を出し横になっていると桜が寄ってきて汗を拭いてくれた。

桜「大丈夫?」

俺「ああありがとう」

と一応返答するがハアハアとかなり息を切らしている

桜「はい お飲み物です」

と飲み物を出してくれた。

俺と桜の仲もこの半年で結構よくなった最初は「マスター」としか  
呼ばなかったが

今では「煉次様」ととりあえず名前で呼んでくれるようになった。

俺は桜と木陰一緒に休む事にした。

シャルン「犬ツチなんだか嬉しそうだね?」

犬神「あああいつは流銀隊長を上回るほどの剣の才能があるからな

もう基礎は一通りできるようになってるし教える側の俺もどんな奴になるか

楽しみになってきたな」

と笑いながら犬神はテレビを見ていた。  
すると

『昨夜、火星の何箇所かで新型の刀機が発見されました。

情報によるとその刀機が居た場所は町があるはずにも関わらずそこには何もなかった大きいクレーターしかなかったようです』  
とこのニュースを聞くと犬神はピクツと反応し

シャルン「遂に出来たみたいだよ」

犬神「ああそろそろ行動するか」

と言うと

犬神「おい！煉次！修行は終わりだ！

そろそろ本格的に動くぞ」

と言うと犬神は西洋の剣を抜き

犬神「いでよ！我が舞姫【シャルンホルスト】」

と言うと刀神機が現れ俺も

俺「いでよ！血桜を舞わせる我が巨人【血龍刃】」

と言い刀神機を出す。

そして俺と犬神は同時に剣を地面に刺した。

すると魔方阵が現れ俺と犬神は刀神機に乗った。

俺「で？動くって具体的にどうすんだよ？」

と通信を開き聞いた

犬神「まあいいからついて来いって」

と言うと犬神はブースターを発動し移動を開始した。

俺も急いで

俺「桜追いかけるぞ」

と言うとブースターを発動させ犬神を追いかけた。

## 第1部：第4話：『死神』

しばらく後を追いかけると突然止まった。

俺も止まり犬神の横に並ぶ

すると犬神が通信を開き

犬神「そこから少し覗いてみな」

と言われて少しだけ覗いた。

すると此処は崖のようではぼ90度の壁の上から見ている感じだった。

そしてその奥には見覚えのある刀機が30機ほど

そして見覚えのない刀機のような物が5機ほど

そして直感だが刀神機が1機

俺は覗くのをやめ

また犬神の横に並んだ

俺「で？こいつらがどうしたんだ？」

と言う中犬神は

犬神「7番隊の副隊長の【轟】いっしのねか・・・」

と呟いていた。

犬神「おい！煉次雑魚は俺が片付ける

いいか？あの刀神機が来たら逃げろ

来るまでは見覚えのないあの刀機を潰していけ  
いいな？」

と言って進んでいった。

そして最後に

犬神「俺のことは気にするな

いいか？本気で戦えこれは修行じゃない

戦場だつてことを頭に叩き込んでけ！」

と少し怒鳴ってからまた歩き始めた。

犬神「俺は12番隊副隊長 犬神 恭介だ」  
と通信をオープンにして話した。

オープンにするって事はスピーカーで話しているような状態だ。  
轟「ほうあの流銀隊長の部隊の奴か」

と返答があった。

そして犬神は轟と奥へ消えていった。

そして目の前には計35機の刀機だけが残った。

俺は崖の上から詠唱を始めた。

俺「龍の炎は業火の炎

今こそ業火の炎は断罪のために吹き荒れる！

【ファイヤー・ブレス】！」

と言つて刀を掲げる

すると炎が刀に纏わり

俺は下に降りたと同時に刀を横に振った。

すると飛び散った火の粉は突然火の勢いを増し

まるで龍が炎を息を吐いたように周りが炎に囲まれた。

俺「俺の名前は春日 煉次！

刀神機『血龍刃』を操りし者だ！

いざ尋常に勝負！」

と言つて俺は自分の戦いを始めた。

俺「まずは1体目！うおら2体目！」

と最初は数えながら戦っていたがもう何体倒したか忘れた。

俺「桜 大丈夫か？」

と聞くと

桜「各機関問題ありません

ダメージも5%にも達していないので大丈夫です」

と返事が来た。

俺はそれを聞くと安心しまた前をみた。

そこには見た事のない刀機が5機

俺「あいつら新型か？」

桜「恐らくは少なくとも刀神機ではありません」

とやり取りをしていると突然構え撃ち始めた。

俺は直感で（これはガードじゃやばい）と感じ避けた。

すると後ろで爆発し山済みだった刀機の跡が消えていた。

俺「おいおい嘘だろ・・・」

桜「そんな・・・戦艦クラスのレーザー銃なんて・・・」

馬鹿げたほどの威力の高い遠距離砲を相手は使ってきた。

そして一体が撃ち終え充填している間にまた違う刀機が撃ってくる。

そしてまた撃ってくる・・・

近づけないし何もできない完璧と言わざるを得ないコンビネーションだった。

俺「たしかこの戦法

ええつと大昔の織田・・・」

桜「織田信長の足軽部隊のような戦い方ですか？」

俺「そうそれ！」

と会話をしながらも避ける事を最優先している

そして5体目打ち終えた瞬間一瞬だけ隙が出来た。

俺は1体目ではなく2体目を狙った。

ズガン・・・

という音と共に縦に2つ別れた刀機

そして俺は休まずに刀を出したまま一回転した。

すると横に2つに切れた刀機が2体

そして4体目に突っ込み真ん中を突き刺した。

俺「これで4体！お前でラストだあ！」

と言って俺は走りながら斬り抜けた。

少し静寂が訪れた後・・・

ドカン！・・・

と爆発する音が聞こえた。

桜「周囲に敵影なし

敵殲滅しました。」

俺「桜お疲れさん」

桜「煉次様こそお疲れ様です」

と呑気に会話をしているが

大量の残骸の中俺と桜の紅い機体がまるで死を運んで来たかのように立っている。

そしてその中もう命も長くない隊員が最後の気力を振り絞り本部へこう伝達した・・・

『死神が・・・死・・・神が・・・』

しかしこの通信を俺も桜も知るわけもなく

巨人の中で呑気に話していた・・・

第1部：第5話：『新しい仲間？』（前書き）

なんだかその内サブタイトルが重なりそうです^^；

## 第1部：第5話：『新しい仲間？』

俺は急いで犬神の所へ向かった。

俺「なん・・・」

桜「すごい・・・」

そう言うしかなかった。

犬神の薄い碧色の機体と相手の黒く重そうな機体が戦っていたがその戦いが

凄かった。

犬神「我は呼ぶ！出でよ風の精よ【カマイタチ】」

轟「我を守る鉄壁の壁よ今こそ姿を現せ【アース・ウォール】」

と犬神と轟が短時間で詠唱をすると風が舞いそれを土で出来た壁が遮る

そして休む暇なく

犬神「風の精は新たなる風を呼ぶ【ソニックウェーブ】」

轟「鉄壁の壁は最強の武器となり相手を貫く【アース・スパイラル】

」

と連続で詠唱をする

すると先ほどとは比べ物にならないほどの風が舞い上がり

風の刃と土の矛がぶつかり合い

衝撃と共に散った。

桜「複合詠唱・・・」

俺「なんて奴らだ複合詠唱なんて上級手段を普通に使ってやがる・・・

」

複合詠唱とは最初にすぐに発動する魔法を発動する

もちろん詠唱が短いので威力はさほどないが

そこから引き続き詠唱を唱える

するとさっきの分の詠唱も含まれているので上級クラスの魔法を隙

なく出す事ができるのだ・・・

では誰でも使えるのでは？と思うが戦いの最中詩を1つ思い出すだけでも困難なのに

2つ合わせるなんてパートナーとよほど息があっており

さらに魔法を発動する精神力がよほど高くないと出来ない芸当だ。

俺「犬神がなんで逃げると言っただか分かった」

桜「ええこれほどの敵と戦えば生きて帰ることが難しくなりますから・・・」

と正直圧倒されていたが

俺も桜もいつまでも見ているわけにはいかない

俺「だけど俺達は・・・」

と言つて続きを言おうとすると

桜「いつまでも見るわけにはいかない

ですよ？

分かっています 行きましょう煉次様」

そう言われて俺は『ああ』と言つて詠唱を開始した

『我の名の元に荒ぶる炎を身に纏いし誇り高き龍よ！

その御力今こそ我の前に現れ出でよ！

業火の炎に焼かれ灰塵となれ！

【ファイヤー・ドラゴン】』

と詠唱が終ると同時に俺の剣に龍の姿が浮かび上がる

俺は剣先を黒い機体に合わせ突進した。

ゴオオ・・・

と言つ音と共に物凄い速さで移動する

ガギン・・・

と音がしたがかすっただけだった。

しかし威力は凄まじくかすった部分から物凄い煙が出ていた。

そして俺の通った道もまるで焰龍が通ったかの様に炎の道が出来ていた。

轟「な！かすっただけなのにこんな威力だと！」

氷「右腕損傷率80％

右足損傷率67％を超えています・・・」

轟「そんなにか・・・傷は大丈夫か？」

氷「なんとか・・・」

犬神「アレの未完成版が俺達を襲ったアレか・・・

恐らくアレでもまだ未完成だろうがなんとも凄いな・・・」

シャルン「まだ精神力が安定してなから上級魔法を抑えられてないから

抑えたらとんでもない事になるよ」

と副隊長クラスの二人を驚かせながらの登場

もちろん俺には聞こえていない。

俺は犬神に通信を開き

俺「手助けする！」

と言った犬神は「ああ止めをさすぞ！」

と言って前へ出た。

俺もそれについていき

犬神が切りかかるが左腕で止められた。

続けて俺が切りかかるがこれも止められ

低い声で『残念だったな』と聞こえたが

俺「それはこっちのセリフだ」

と言い返したすると

ザン・・・

と音がし機体足と手が切られた。

そう犬神が切ったのだ。

そして黒い機体は光に包まれ元に戻った。

するとそこに筋肉がムキムキの黒髪の男の人がアチコチから血を出しながら倒れていた

俺と犬神は刀神機を直し男の所へ向かった。

犬神「轟すまん・・・」

轟「気に・・・するな

確かに今の政府は少しおかしい

新しい刀機が出来てからさらにおかしくなっている

今後の世界が見れないのが少し惜しいがお別れだ・・・

すまんが氷牙の世話を見てやってくれ・・・頼む」

と言つて息を引き取った。

すると青い髪の15歳くらいの女の子は

ポタリ・・・

と一筋の涙を落とし消えた

そして剣が地面に刺さっていた

犬神「ああ・・・じゃあな

轟・・・」

そう言つて剣を抜き収めた

俺「それはどうなるんだ？」

犬神「俺はDNA・・・遺伝子が適合しないから俺は刀を持てるだけだ

この刀の覚醒者になれるのは遺伝子の適合が合っている人間だけだ」  
俺「それまではさっきの女の子は出てこないのか？」

犬神「そうなるな・・・」

と言つて俺がさっきの剣を触ると光りさっきの女の子が出てきた。

俺「え？え？」

と混乱していると

氷「私の名前は氷と言います」

と自己紹介された。

犬神「な・・・『二重契約』？」

氷「いえ違います契約ほどの適合は持っていませんが私を呼ぶくらいのはんの少しの適合

があつたので出てきました」

と言われて犬神は納得した。

俺はとりあえず（旅をする仲間が一人増えたと思えばいいんだよね？）

ととりあえず納得した。

## 第1部：第6話：『神の眼作戦』

俺達は気を取り直してまた旅に出ようとした時・・・

グニャア・・・

と俺の視界が歪む

俺（あ・・・あれ？）

と思ったときに俺はもう気を失っていた

桜「煉次様！」

と最後に桜の叫び声が聞こえた・・・

―政府本部―

？「報告には死神が現れたと言っていたが？」

？「恐らく刀神機でしょう」

モニターで少しですが確認されました。」

？「しかし、呼び名が無いと困るな」

？「では報告通り死神でいいではないか

それとも墮天使と呼ぶか？」

？「そんな事はどうでもいい

それより轟が居なくなっただつまり戦力が減ったという事実だ」

そう口論する中玉座に座っていた男が

「もういい

どうせ例の作戦を遅くとも始めるつもりだったのだ

それが早くなったと思えばいい

各隊長に通達

これより反乱軍を殲滅する指令は後々各部隊に通達する  
始めるぞ【神の眼作戦】」

『了解！全ては王の為に！』

そう声を揃え言った後  
慌しく去って行った。  
そして王と言われた人間は  
王「もうすぐだ・・・」  
もうすぐで我の長年の夢が叶う」  
そう言って笑った。

―煉次―

俺は目が覚めたがまだ頭が少しくらくらする  
俺はいつの間にかベットにいた。

俺「ここは？」

と呟くと

桜「宿です」

と桜が横から答えてくれた。

俺「うお！いつの間にいたんだ？」

桜「ついさっきからですよ」

と言われ俺は『そうか』と苦笑しながら言った。

俺「ところで俺はなんで気を失ったんだ？」

と聞くと丁度犬神が現れ

犬神「そりゃあお前があれだけ凄い威力の魔法を使うからだよ

魔法つてのは前にも教えたが精神力を使うんだ

お前はあれだけの威力の魔法を無駄な消費もかなり多い状態で使っ

たんだ

2、3日寝てても不思議じゃないような消費量なんだぜ」

と言われて俺は気がついた。

俺「俺はどれだけ寝てた？」

と聞くと

犬神「一日だよそれまでの間桜ちゃんが寝ずに面倒見てたぜ感謝するんだな」

と言うと

桜「私は当然の事をしたまでです」

と言ったが俺は

俺「ただありがとな」

と笑顔で言うと言顔を赤くして『いえ』と言った。

シャルン「犬ツチ」

と呼ばれ犬神が『ん?』と振り返る

シャルン「どうやら政府が本格的に動き出すみたいだよ

隊長クラスの人達も行動し始めたみたい」

と聞き犬神は顔色を変え

氷「どうやら例の作戦を始めた見たいですね?」

といった間にかいた氷が無表情のまま言う

犬神「ああ・・・」

と何かを考えながら答えた。

俺「なんだよ例の作戦って」

と俺が聞くと

犬神「反乱軍を一掃するつもりなんだよ」

と答えた俺は驚きながら

俺「じゃあ行動しないと!」

と言うと

氷「先ほどシャルンさんが言いましたが隊長達も行動を開始しているんですよ?」

と言われ俺は前戦った轟という人を思い出した

俺「そういえば轟さんでも副隊長ってことは」

犬神「もちろん桁違いの強さだよ」

と言われ俺は何故犬神が悩んでいるか分かった。

犬神「しかしいつまでも見ているつもりはねえよ

とりあえずこの町をでるぞ」

と言って宿を出た。

俺はなんとなく桜を見ると右手が少し火傷していた。

それを見られたと感じたのかサツと手を隠したが

俺「それさっきの戦いでか？」

桜「いえ・・・違います」

と言うが

俺「正直に言えば俺は嘘をつく奴は嫌いだ」

と言うと俯きながら『すみません』と言った。

そして俺は桜に近づき

俺「ったく 正直に最初から言えばいいのに」

と言い桜の顔を見ると

俺「え！」

と驚いた桜は泣いていたのだ

俺は『え？え？』と混乱していると

桜「すみません・・・こんな火傷をしていると捨てられると思って・

・・・」

と桜は言った。

確かに世の中には役に立たないと思った瞬間に捨てる人間も居るだろうけど

俺「そんな事気にしてたのか？大丈夫だって俺のパートナーはお前だけだよ」

と言って頭をクシャクシャとした。

俺「それによ・・・ほら・・・笑ってる桜のほうが・・・可愛いし」

とぼそぼそと言うと桜はニコツと笑顔で

桜「はい！」

と言った。

そして俺と桜も宿を後にした。

## 第1部：第7話：『サラとの出会い』

俺達は町を出て俺達は町を見て回るためまた旅を始めた。  
そして破壊された町を見つけた。

俺「ひでえ・・・」

そう俺が言ったのも無理はない

桜は眼をそらして見ようとしないほどだ。

町は火の海

そして生きて居そうな人間はいなく

黒焦げな人間だけ

俺は少しの可能性に賭けて

巨人を降り探した。

俺が町に降りるとひどい匂いがする。

俺はそんな中生存者を探す

すると成人の男性が何人が現れた。

男「お前も生き延びた奴か？」

それじゃ一緒に逃げようぜ」

と誘われた。

しかし、俺は最初の言葉が引っかかった

俺「生き延びた？」

と聞くと

男「仕方なかったんだよ・・・

お前は運がよかったただけなんだよ

女も助かるなんて・・・」

そう言つて男達が桜を見る

俺「それで見捨てたのか？」

男「そうしないと自分が死んじゃう！」

俺「お前それでも男かよ！」

と殴ろうとすると桜が止める

俺は『チッ』と舌打ちをして生存者を探した。

しばらくすると遠くで『誰か・・・』

と声が聞こえた。

俺は剣を抜き

ザンツと瓦礫を切ったするとそこには

俺と同じ年くらいの金髪の長髪で青い目の女の子がいた。

服はボロボロで俺は彼女に手を差し出し

俺「もう大丈夫だ」

というとポロポロと涙を流し

？「怖かった！」

と言って抱きついてきた。

桜が一瞬ムツとしたが

とりあえず俺は上着を彼女に着せ

剣を抜き

俺「桜戻るか？」

と言って巨人に戻った。

広い空間の巨人の中俺と着物姿の桜は少し話していると

彼女が意識を取り戻したらしく

？「先ほどはすいません」

と言って来た。

俺は『もう大丈夫か？』と聞くと『はい』と答えた。

？「あの・・・ここは？」

と聞かれ俺は『刀神機の中だけど』と答えると

？「あなた刀神機が使えるって事は覚醒者？！じゃあ政府の人間？」  
と聞かれ

俺「覚醒者だが政府の人間ではないな」

と答えると『そうなんですか』とホッとしていた。

？「あ！私の名前はサラ・グリーンです」

と思い出した様に言った。

俺「俺は春日 煉次だ」

桜「煉次様のオペレーターの桜です」

と自己紹介をする。

俺「俺達いまから仲間に合流してまた違う町に行くけど  
そこで降りるか？」

と聞くと

サラ「えつと・・・あの私も一緒に行つてはだめですか？」

と意外な答えが返つて来たので俺は犬神に通信を取り

俺「いいとさ」

と言うとサラが喜び『ありがとうございます！』と抱きついてきた。  
すると突然警戒音が鳴り響く

桜「刀神機が1機接近中」

と言われると同時に回りが景色に変わる

俺は剣を抜き

俺「相手はどこだ」

桜「後10秒ほどで肉眼でも確認できます」

と戦闘態勢に入った。

俺「サラだったな 少し離れてろ！」

と言つて俺は構えた。

運が悪く犬神が此処に着くまで一時間はかかる

俺は覚悟を決め戦う事を選んだ。

刀神機の姿が見え俺は

俺「桜！行くぞ！」

と言つて戦いを開始した。

相手は赤い機体で白く輝くブースターがまるで羽根のような印象を  
与えた。

すると犬神から通信が入り

犬神「気をつける！そいつは俺の居た部隊の隊長の流銀隊長だ！」  
と通信が入った。

しかし時は遅く俺とその白い機体はもう剣と剣を重ねていた。

## 第1部：第8話：『新しい覚醒者』

ガキン・・・

と刀と刀が打ち合う音がする。

俺「クツ・・・」

なんて力だよ」

俺はそれを跳ね除け攻撃に入ろうとすると

俺「な！ヤバイ！」

と眼の前にもう次のモーションに入っていた。

そして目にも止まらぬ早業

ガキン・・・ザン・・・

横腹に剣が刺さった。

俺「桜大丈夫か！」

桜「クツええ・・・」

俺でも無理をしていると分かるほどの苦しみらしい

そして、桜に気をとられている間に

キン・・・

と剣を弾き飛ばされた。

俺は『マズイ』と思いつつなんとか白羽取りしたが時間の問題だろう

俺「ツチ・・・音声システムオン」

と言うと目の前にメニユーが現れる

俺「神経伝達システム

オペレーターへの負荷を操縦者へ変更」

と言うと桜が『ダメ！』と叫ぶが操縦者の言う事は絶対

変更され白羽取りのせいで手から血が流れ始める。

俺「くつ・・・これまでか・・・」

と諦めそうになるが『いやここで諦めるな！まだまだ！』と強がるが

もう血で力が入らなくなってきた。

サラ「私・・・また何もできない・・・助けてくれた人に恩返しもできないの？」

誰か・・・私に力をこの人を守るほどの力を！」

とサラが言うのと氷牙が反応した。

そして氷が出てきて

氷「私があなたに力を与える事ができます」

と言うサラは答えようとするが

俺「やめろ！その力を手に入れるとお前も戦わないといけなくなるぞ！」

と言うが

サラ「何もしないより・・・何かしたいの！」

と言って氷から氷牙が受け取った。

そして光と共に消えた。

俺は自分の無力さに怒りを覚えた。

俺「畜生！そこをどけろ！」

と刀を弾き相手を殴る

だがそれが限界で手から血がボタボタと流れ正直あまり力が入らない  
すると光と共に見覚えのある黒い機体が現れた。

そして通信が入った。

そしてその相手を見て『サラ?!』と驚いた。

サラ「此処からは任せてください」

と言うと黒い機体はまた光に包まれ形が変わった。

俺「え？」

と不思議に思うと

桜「刀神機はその登録者によって形を変えます」  
と少し怒り気味に答えた。

そして赤い機体の奴と戦っていたが正直初めての戦闘ということもあり

俺「桜・・・俺達もいくぞ」

と言った。

桜「ではシステムを変更を！」

俺「ダメだ！いいな変更したら許さねえからな！」

と言うと俺は手を見て刀を握れないと思い

俺「手がダメなら足を使うまでだ！」

と言ってブースターを使って一気に距離を縮め蹴った。

そして一旦距離を取る赤い機体・・・

俺とサラは並び次の攻撃に備えた。

第1部：第9話：『サラの宣戦布告』（前書き）

そろそろ2部目に行く事になりそうです^^

## 第1部：第9話：『サラの宣戦布告』

それからしばらくの時間が流れた。

俺のアチコチに傷が目立ち

血が傷口から流れている

もう何度切られただろう

もう何度桜の叫び声を聞いただろう

桜はもう叫ばずにただ泣きながら俺の指示に従う

俺は一瞬でも気を抜くと意識が飛んでしまいそうだ。

それもそのはず俺はサラを庇い必要のない攻撃まで受けている

そしてそのダメージは通常オペレーターの所へ行くが俺が自分に来るようにしているのだから・・・

通信の向こうからサラが泣きながら何かを必死に言っている  
だが俺の耳には届かずもう何を言っているのかもわからない  
少しして犬神が来たようだ俺に通信を開く

犬神「おい！無事か！桜ちゃんは大丈夫か？！」

と聞くが俺を見て

犬神「まさかお前・・・システムを」

と言ってから『クソ！』と言い放ち通信を切った。

犬神の機体が現れ

犬神「流銀隊長！流銀隊長でしょう？お願いします！今は今だけは  
引いてください！」

と声が聞こえた。

そして俺の方をチラッと見て

流銀「強くなれ・・・お前は今より過酷な運命を背負いし者  
我の名前は流銀。12番隊隊長の流銀だ。俺は地球で待つ」

と通信を送ってきた。

そこには黒い髪に黒いサングラスをした渋い人がいた。  
そして赤い機体は何処かへ飛んでいった。

そして俺はバタ・・・倒れた。

光に包まれ巨人が消え

サラと犬神も急いで巨人を片付け俺の所へ来ようとする。

サラ達が来るまでの間

桜「もう・・・もうあんな無茶はしないでください

私煉次様が居なくなると思ってた怖かった・・・」

と涙を流しながら俺の傍らに居る桜俺は頭をクシャと撫で

俺「ばか・・・俺がそんな簡単に消えるか」

と小さい声で言った。

俺は桜に膝枕をされながら

俺「桜いい匂いがするな・・・すまんちよっち寝るわ・・・

すまん綺麗な着物を俺の血で汚して・・・」

と言って俺はスースーと寝息を立てた。

そして桜は涙を流しながら笑顔で『いいえ、煉次様・・・好きです・

・・・』

と小声で言ったがもちろん俺には聞こえていない

少ししてからサラがやってきた。

サラは桜を見て

サラ「ああ！・・・うう」

と羨ましそうに見て

サラ「私・・・私！桜ちゃんに宣戦布告します！」

と言った桜は俺を見て

桜「私も負けませんよ」

と言った。

氷は『がんばってください。サポートします』と言っていた。  
そして犬神が来てとりあえずさっきの町に戻る事にした。  
俺は桜の膝の上で平和そうに寝息を立てながら寝ていた。

俺が目覚めた時にはもう外は暗く

俺はアチコチに包帯を巻かれていた。

そして桜がずっと看病していたのか

俺のお腹の辺りで寝ていた。

そして『ん』と目をこすりながら起き

俺は『起こしたか？悪い』と言うつ

桜『いえ！それより大丈夫なんで・・・ムググ』

と大声で言い出したので俺は口を塞ぎシーシーと口に指を当てを静かにしろつとジェスチャーした。

そして桜はコクコクと頷き俺は抑えていた手を離れた。

俺『たく・・・今は夜だろ？』

というところ『すいません』と申し訳なさそうにいった。

俺『俺こそお前に随分心配かけたみたいですね』

と言つと桜が『外に出ますか？』と言ってきたので俺は『ああ』と言つて立とうとすると

グラ・・・

として倒れる。

俺『イチチ・・・』

と言つて立とうとするが力が入らず桜が手を差し伸べてくれた。  
俺は『すまん』と言つて手を受け取り肩を借りながら外へ出た。  
そして、外で綺麗な夜景が見える中俺と桜はベンチに座った。

そしてその光景を隅から見ているサラ

氷『いいのですか？』

と聞くと

サラ「今日だけは許してあげるわ  
戻りましょうか？氷」

氷「はい」

と言って宿に戻っていった。

そして俺はというと桜と星を見ながら会話を楽しんでいた。

第1部：第9話：『サラの宣戦布告』（後書き）

そろそろ2部目に行く事になりそうです^^

しかし全部で一体何部になることやら・・・（現在4部までと考えてますが増えるかもしれません^^；

## 第1部：第10話：『火星との別れ』

それから数日後

俺の傷も治り流銀とやらが言っていた通り地球に行く事にした。

俺「で？どうやっていくんだ？」

と俺が聞くと

犬神「その件なら大丈夫だ

実は流銀隊長は反政府軍に入っているから

恐らくあいつらのところに行けばいいだろう」

と言われ犬神はある町にある反政府軍の本部に向かった。

俺「しばらく暇だな」

と俺が言うと

桜「では町を歩きますか？」

と桜が言ってきたので『あぁいいな』と答え歩きだした。  
するとズシツと右手が急に重くなった。

原因を見るべく右手を見ると

俺「サラか・・・ほら離れろって」

と引き剥がそうとすると

サラ「うゝいいじゃない！」

と言ってくる俺は仕方なく『ハイハイわかった』

と言って諦めるが今度は左手が重くなる

俺「うわ！」

と声を出すと「すみません」と声がする。

俺「え？桜？」

と左手を見ると必至に腕を掴む桜

俺は『まぁいいか』と言って両手に花ということわざを思い出しな

がら町を歩いていた。

しばらくして俺と氷は大量の荷物を両手に抱えていた。

俺「お前ら・・・買いすぎ」

と突っ込む

そして荷物を降ろしゆっくりしていると犬神の刀神機が現れた。

クイクイと人差し指を動かしている

俺「ついてこいつて事か？」

と思いながらとにかく荷物をまとめ俺は血龍刃にサラは氷牙に乗った。

それから5分ほど移動すると大きい船が空中に浮いていた。

俺「宇宙船？」

と俺が聞くと

犬神「ああこれから世話になる所だ

船内は後で紹介すつからとりあえずこつちだ」

と宇宙船に入った。

宇宙船に入り刀神機を片付け

俺「さてとこれから世話になるんだろ？じゃあ艦長に挨拶に行こうぜ」

と俺が言うと

犬神「それはいらねえよ

ここの艦長は流銀隊長だ。そしてその流銀隊長が居ない間は俺が艦長と言っことになっている」

そしてみんな同時に

『ええ〜!!』

と言った。

犬神「こいつらは分かるがシャルンなんでめえまで一緒に驚いてんだ？ああ？」

と言ってシャルンのホッペをグイグイ引っ張っている

シャルンは『いひやいいひやいつへ（痛い痛いって）』と言いなが

ら抵抗していた。

俺「そうか・・・まあ仮にお前が艦長でしょう」

犬神「仮にじゃねえよ　今は艦長だって」

サラ「わかったって」

俺「で？地球には何日後に着く？」

と会話をすると

犬神「それなら気にするな一瞬で着く」

と言ったまた皆同時に

『ええ〜！』

と驚くそしてまた犬神はシャルンのホッペを引っ張っていた。

何はともあれ俺はあまり機械とかに詳しくないから知らないが  
今宇宙ではこの移動方で移動しているのが普通らしい  
仕組みはなんとなく聞いたが光がどうか言っていた気がする。

そして火星を最後に見ながら

俺（美奈子・・・元気にしてるかな？）

と見ていると一瞬で消え次の瞬間には青い惑星が見えた。

俺「これが・・・地球？」

犬神「ああ綺麗だろう？」

と少し会話してから

犬神「戦艦はここで待機ここからはいままで通り俺と煉次とサラの  
3人組でいく

いいな？まだ政府には見つかるなよ」

と言って俺達は刀神機に乗り宇宙にでた。

無重力での操作は初体験で操作しにくかったがどうにか地球に近づき  
犬神「いいか？なるべく固まれこれから大気圏を突入するぞ！」

と言って犬神は俺とサラを捕まえる

しばらくするとアチコチの計器から警告音などがする

俺「大丈夫なのか？」

犬神「ああ刀神機は大気圏を突入できるようになっている  
だからオペレーターにも何も伝わらないはずだ」

と解説があり俺はそれを聞き安心して大気圏に突入した。  
突入してからは桜と呑気に会話をしていた。

少ししてから大きい衝撃が起こり周りを見ると

俺「これが・・・海？」

と俺は生まれて初めて海と言ったものを見た。

犬神「ああ水中での戦い方覚えてるな？」

俺「逆らわず」

サラ「流れにまかせて」

と俺とサラは息を合わせていった。

犬神は『そうだ』と言って当初の計画通り流銀を探す旅に出る事にした。

**第1部：第10話：『火星との別れ』（後書き）**

次からは舞台は地球に移り第2部の始まりです^^

**第2部：第1話：『両親と再会』（前書き）**

遂に第2部に突入です^^

この第2部は地球での出来事を書いていくつもりです^^

## 第2部：第1話：『両親と再会』

俺達はしばらく海の上をブースターを使いながら移動していた。すると目の前に島が見えた。

俺「あそこは？」

と俺が聞くと

犬神「極東の日本と言う国だ」

俺「日本・・・」

日本俺が住んでいた第二日本の元となった国  
言わば俺の故郷の故郷だ。

そして、その日本の首都東京へ着いた。

海岸で目立たないように降り

そして電車などを使い都会までやってきた。

そこは火星とは比べ物にならないほど高度な文明で栄えていた。

犬神「ここは政府や反乱軍と違い中立を守っている国だ

襲われなければ何もしないがこの国は見ての通り技術が凄い

つまり一度襲われればとんでもないしっぺ返しが帰ってくる」

俺はそれを聞き

俺「だから？」

と素直に聞いた。

するとシャルンが

シャルン「その中立の国の最高技術者があなたの両親

つまり貴方は中立軍に入るのよ」

俺「じゃああの反乱軍を裏切れと？」

犬神「そうじゃないアレも中立の奴らだ」

俺はその答えに『じゃあなぜ？』と聞いた。

犬神「さっきも言った通りこの国は何もしなければこっちも何もしない

しかし準備と言うのは必要でな・・・俺と流銀隊長は言わばスパイだ  
最近政府は戦力を急速に上げ反乱軍も増大していく

そして情報では両軍ほぼ同時にこの日本の技術を奪おうと襲ってくるんだ」

それを聞き俺は『な！そんな事になったら』

シャルン「今の日本の技術を使えばとんでもない刀機が出来るわ・

・  
それも刀神機を超えるほどの・・・」

サラはそれを聞き続けて

サラ「その兵器を戦争に使うってわけ？」

というと犬神が『ご名答』と答えた。

桜「しかし刀神機を超える機体なんて・・・」

と言おうとすると止まり

桜「まさか！」

と思い出したように驚くそしてシャルンが

シャルン「そう・・・桜ツチの予想通り【核】よ」

核と言う言葉に俺とサラ以外は静かになった。

俺「なんだよ核って？」

サラ「そうよ」

と聞くと

桜「煉次様・・・核と言うのは国を1つ軽く潰すほどの威力を持つ  
エネルギーのような物です

そして今の日本の技術を使えば新しいエネルギーとなりとんでもない  
威力の兵器を作り出す事ができるの・・・」

と言う

俺とサラはそれをただ聞くだけしか出来なかった。

俺「そんな技術を俺の親父と母さんが・・・」

と言い続けて『わかった行こう！』

と言い俺達はまた歩く

空を飛ぶ車・・・高いビル・・・まさにSFの世界に迷い込んだ感じだ

俺達その中でも一際大きいビルに近づいた。

俺「ここに親父と母さんが・・・」

もう何年会っていないだろう・・・

顔もうつすらとしか覚えていない

俺達は受付に行き

俺「春日<sup>かすが</sup> 遥<sup>はるか</sup>と春日<sup>かすが</sup> 洋司<sup>ようじ</sup>はいますか？」

と俺は俯きながら言う

俺は親父と・・・

母さんと一緒に遊んだ記憶はない・・・

受け付け「そのお二方とはどういったご関係で？」

と聞かれ俺は『息子です・・・』

そう言う

受け付け「一応念のためお名前とそれを証明するものは？」

と言われ俺は唯一母さんに貰った三日月のペンダントを取り出し

俺「春日 煉次です」

これは母から貰ったものです」

そう言うて受付の人は電話を شدした。

少ししてから若々しい2人の姿が見えた。

年が40には見えない俺の両親

長髪 of 金髪に赤い瞳が似合う俺の母さん

黒い髪に黒い目に眼鏡そして髭がだらなく生えている俺の親父

両方とも一瞬見るとまだ20に見えるくらい若々しい

そして俺を見ると

遥「煉次！」

と母さんが走ってきて俺を強く抱きしめた。

洋司「煉次・・・久しぶりだな」

俺「ああ二人とも元気そうだな」

と軽く挨拶をし俺の後ろを見た。

遥「こちらの人達は？」

と聞かれ俺は

俺「あの髪がオールバックの人は犬神恭介その横にいる子はオペレーター  
のシャルン

あの金髪の子がサラリグレーンその横にいる子がオペレーターの氷  
そしてあの着物を着ている人は俺のオペレーターの桜」

と言うと

遥「そう・・・洞窟にあつた剣を抜いたのね？」

と言われ俺は頷いた。

遥「やつぱり・・・運命には逆らえないのね・・・」

煉次「・・・美奈子ちゃんは？」

俺「火星に置いてきた。」

遥「そう・・・確かに連れ来ると危険が多い物ね」

そして母さんは立ち上がり

遥「研究所に案内するわ

犬神さんはそこに居るあの方と話がしたいのでしょうか？」

と言われ犬神は『はい』と言って歩きだした。

そして今まで何も言わなかった洋司が

洋司「煉次・・・遥は言わなかったがお前が美奈子と離れた事は

お前が苦しむ結果になるだけだ

気をつけるあの剣を抜くと言う事は過酷な運命を背負う事を意味する」

と俺の頭をポンポンと叩き

俺「いつまでも子供扱いすんな！俺は自分の力でその運命を超えて  
みせる！」

と言うと洋司は『なら堕ちるなよ』と一言言っ  
て母さんの後を追っ  
た。

俺達も親父の後を追って研究所に向かった。

## 第2部：第2話：『研究所』

ウィーン

と自動で扉が開いた。

遥「涼子りょうこ連れてきたわよ」

と犬神を前へ出す

犬神「お久しぶりです涼子さん」

といわれた先には黒髪の短髪で少し不良っぽい人が居た。

その人こそ大宮おおみや 涼子りょうこである。

涼子「おうそろそろ来ると思ったよこっちにおいで」

と犬神がシャルンをつれて涼子さんと奥の部屋に行った。

そしてサラと氷は研究所の中を見学しに行き

俺は桜と母さんの所にいた。

遥「さてと・・・そのペンダントまだつけてるのね？」

俺「ああ唯一貰ったものだからな」

『そう』と言つて少し悲しそうな顔をする

遥「いい？これから話す事は全部本当よ」

と言つて話を始めた。

遥「あなたは確かに私が産んだ子供よ

だけど突然変異と言うのかしら？遺伝子がね違つつのよ

確かに似ている部分もあるけど・・・

いい？煉次はつきり言うわ

美奈子ちゃんは敵に回ったと思いなさい

そして助けたいなら自分でやりなさい

自分の力を信じれば必ず助けられるわ」

と言われ俺は『ああわかった』そう言つて部屋を出た。

桜「あの・・・煉次様はただ恥ずかしがっているだけです  
久しぶりの再会ですから」

そう言われ何処か悲しそうな顔で  
遥「そうね・・・あなた煉次の側に居てあげてね？」  
と言われ桜も部屋を出た。

俺は外で桜を待っている時親父が  
洋司「血龍刃は特別な刀神機だ  
お前はそれに選ばれた。

いいか？強大な力を手に入れても  
過信はするな何を信じればいいか分からなくなれば  
身近に居る人間を信じろそうすればお前は迷うことなく  
正しい道を歩ける・・・かもな」

と最後は大きく笑いながら俺の頭をポンポンと叩く  
俺「だけど子供扱いなんだな」

というとボソツと『お前はもう十分大人だ。道を間違えるなよ』  
と言つて去つて行つた。

俺「親父」

と呼ぶと『ん？』とこっちを見るが

俺「いや・・・なんでもねえ」

と言い『そうか』と言つてまた歩き出した。

俺はその背中を見てなんだかもう会えない気がした・・・

少しして桜が戻ってきた。

桜「さて戻りましたようか」

と言われ俺と桜は集合場所の食堂に着いた。

するとそこにはすでにサラと氷がいてお昼を食べていた。  
俺と桜も定食を頼みサラの横に座った。

俺「どうだった？」

と聞くと

氷「ええとても凄かったわ」

と氷は答えるが

サラ「あはは・・・まったくわからなかった」  
と苦笑しながらサラは言った。

しばらく会話をしていると犬神がやってきた。  
犬神「ん？もう飯食い終わったのか丁度いい  
そろそろここを出るぞ

涼子さんに報告も終わり先ほど本部に戻った。  
それに流銀隊長から映像メールが届いた。」  
と言ってとりあえず俺達は研究所を出た。

すると入り口犬神が『ちよつと待ってる』と言  
しばらくすると空中に浮く車が現れた。

犬神「涼子からの餞別だ乗れ」

と言つてのる犬神の横にシャルン

俺の横に桜　サラの横に氷が座り車は出発した。

しばらくしてホテルに着く

犬神は306

サラは307

俺は308に泊まる事になった。

とりあえず306に行きさつき聞いた映像メールを見ることにした。  
映像メールを開くと俺が通信越しに見た人が写った。

流銀『すまん・・・大野　美奈子が政府に連れてこられ

洗脳された。ほんの少し目を離れた瞬間にやられた

今そつちに向かっているらしい気をつける』

と言い最後に『機体は刀神機だその名は『虚狼牙<sup>ころうが</sup>』だ。

と言い流銀という人は消えた。

そして桜がガタガタと震え出した。

俺「おい桜大丈夫か？」

と言うが『鈴が・・・鈴が来る』と言ってガタガタと震えている

俺はとりあえず部屋に戻り桜に『大丈夫だ・・・俺がここにいる』とずっと抱きしめていた。

俺の胸元でガタガタと震えながら『煉次様・・・煉次様』とずっと言っていた。

そして俺はずっと桜に『ここに居る大丈夫だ・・・大丈夫』とずっと言っていた。

## 第2部：第3話：『直哉の覚醒』

俺はいつの間にか桜を抱いたまま寝ていたようで目が覚めると目と鼻の先に桜の顔があった。

外は明るくなつていて時計をみると7時を指していた。

俺が桜を起こさないようにゆっくり起きると桜が『煉次様・・・』と言った。

寝言なのだろうが俺は少し悩んでから

また桜がいる布団に入り

俺「今日は特別だからな」

と少し照れながら桜にキスをする。

桜は『ん〜』と嬉しそうな顔を一瞬してく〜と寝息を立てた。

結局起きたのは昼前で

俺が先に起きて少ししてから桜が起きた。

桜は申し訳なさそうに『すみません』と謝るが

俺「気にすんな

それよりもう大丈夫なのか？」

と心配そうに聞くと

桜「ええその・・・煉次様が近くに居てくれたので」

と恥ずかしそうに言うがそれを聞いている俺が恥ずかしい

俺「と・・・とりあえずもう皆飯食いに行ってるから俺達も行くぞ」と適当にごまかし桜と部屋を出た。

俺達が食堂に着くともう犬神と氷は食べ終わったらしく新聞を読んでいた。

そしてその横でデザートをバクバク食べているシャルンとサラがいた。

俺と煉華はサラとシャルンの横に座り

俺「おはようさん」

桜「おはようございます」

と挨拶する

シャルン「おはよう桜ツチ 煉次ツチ」

サラ「おはよう煉次」

氷「おはようございます煉次様 桜様」

犬神「おう 2人ともおはようさん」

と挨拶が返って来た。

サラが俺の名前しか言っていないのは恐らくわざとだろう・・・

そして俺と桜は食事をとり始めた。

俺と桜はタマゴサンドとカフェオレを取ってきて食べ始めた。

俺「俺はこれだけでいいけどお前はそれだけで大丈夫なのか？」

と桜に質問すると

桜「ええ私今日はあまり食欲ないので」

と少し俯きながら言った。

恐らく今桜の顔を見れば涙目になっているだろう

俺は『そうか・・・無理するなよ?』と心配そうに言い

食事を再開した。

しばらくして食事も終わり

俺達はホテルから出た。

そして刀神機に乗り俺達は大阪の方へ向かった。

大阪の近くに着いた瞬間俺は寒気を感じた。

とっさに俺は『避ける!』と叫ぶ。

そしてさっきまでそれぞれの居た場所にレーザーが通り過ぎる。

俺達はそのレーザーを撃った犯人を見つける為に見上げる

そこには太陽の光で少し光っているが黒い機体があった。

それを桜が見た瞬間『あ・・・あ・・・いやあ～～!』

と叫びそれで俺はわかった。

俺「虚狼牙か・・・」

そしてそれは同時に操縦者が美奈子である事を指す

俺と桜の心は完全にバラバラとなり刀神機が勝手に消えた。

そして犬神とサラの刀神機が頑張って戦うが性能と腕が余りにも違いもうボロボロになっていた。

そして戦場の大阪も火の海となっていた・・・

―ちよいと視点変更―

俺の名前は清水<sup>しみず</sup> 直哉<sup>なおや</sup>

大阪のとある学校に通っている現役の高校生だ。

今日も学校で退屈な授業を受け友達と遊び帰りにたこ焼きを食べて帰るつもりだった。

しかし・・・

俺「なんだよ・・・一体何なんだよ・・・」

俺の目の前にはついさっきまで友達だった人の体がバラバラになっていた

もう人間の原型を止めていなかった。

俺「返せよ・・・俺のダチを返せよ！」

と叫ぶと目の前にさっきまでなかった剣が2本現れた。

『私達が』

『あなたの力になります』

と頭に聞こえる俺の中にはもう【復讐】の二文字しかなかった。

俺「力をくれるのか？すまん・・・じゃあ！存分に使わせてもらっ  
ぜ！」

と剣を抜く

そして剣を抜くと目の前に蒼い髪の少女と赤い髪の少女が現れた。

蒼い髪の少女「私の名前は蒼<sup>あお</sup>」

赤い髪の少女「私の名前は紅<sup>くれなゐ</sup>」

同時「あなたのパートナーとなるべき者です」

とゴスロリの服装をした2人の少女が自己紹介する。

そして『剣の名前を・・・刀神機を呼んで』と同時に言われ俺は  
『紅月・蒼月<sup>こうげつ・そうげつ</sup>』と言った。

すると目の前に青い機体が現れた。  
そしてそれに乗り込んだ・・・

## 第2部：第4話：『もう一人の桜』

俺が刀神機から降ろされしばらく経ってから突然青い機体が現れた。

犬神が何回か通信を送っても返事がないらしく両方を見比べている・・・

一方俺は気を失いながらもビクツビクツと痙攣をしているようにたまに動く

そして、『いやあ・・・いやあ・・・』とうわ言で何度も何かを拒む、

俺はそんな桜を優しく抱き上げ

俺「クソ・・・俺が不甲斐無いばかりに・・・」

と自分の馬鹿さに嫌気がさした。

俺は桜を落ち着かせるために

俺「桜・・・桜・・・」

と出来る限り優しく呼びかける。

桜「ん・・・」

と目が覚め俺を見ると

桜「いやあ！」

と俺を突き飛ばし壁でガタガタと震える。

俺は近づき頬にそつと手を当て抱きしめた。

桜「いや・・・来ないで！来ないで！」

と泣きながら必死に俺の背中を引つ掻く

俺は『クツ』と痛みに耐えただ桜を抱きしめた。

その時『お前たちか・・・俺の日常を滅茶苦茶にした奴は！』

と聞き覚えない声が響き渡る。

そして、青い機体は虚狼牙は軽く避けた。

俺は桜の背中越しにそれを見て

俺「あの速さをいとも簡単に・・・」  
と驚いた。

そして、虚狼牙は3機の刀神機を相手にしながら戦い始めた。

俺はガリリ！と音がし背中に激痛が走った。

俺は桜を強く抱きしめ『大丈夫だ！俺が・・・俺がいる！』  
と言うと少し大人しくなり

光のない目で『誰？』と聞く

俺はその光のない目を見ながら

俺「煉次だ・・・春日 煉次・・・わかるか？・・・か・す・が・  
れ・ん・じだ」

と丁寧に教えると

桜「れ・・・んじ？・・・煉・・・次・・・れんじ・・・煉次」  
と言葉を繋げ

そして、目に光が戻ってくる。

桜「煉次様！」

と俺に抱きつく俺は桜の頭を撫でながら『もう平気か？』と聞くと  
桜「はい・・・すいません」

と俺の背中に手を回した時・・・

又ルリ・・・

と感触があり桜が自分の手をみると手が赤く染まっていた。

桜はその時俺にした全ての事を思い出し

桜「すいません！私・・・私・・・」  
と泣き出した。

俺は『またか』とため息をつき桜に顔を近づけ

俺「これで泣き止まなかったら親父恨むからな・・・」  
と言って桜の唇に俺の唇を重ねた。

桜は最初驚いていたがすぐに顔がトロンと顔が緩んだ。

少しして俺が『もういいだろう』と思い離れようとする  
と俺の頭の後ろに手を回し無理矢理くっつけた。

そして、俺の口の中に舌を入れ出した。

俺は『む．．．む』と苦しがり少し力を入れ  
『プハ!』と桜から離れた。

離れると桜はぺろつと舌で唇を舐めた。

この時ゾクツとするほど桜が妖艶に見えた。

桜「大人のキス．．．どうでした？」

と今までの桜とは違いなんだか大人っぽくなった気がした。

俺「お前．．．桜か？」

と不安気に聞くと

桜「ええ．．．」

と頷きそして、胸に手をおき

桜「だけど．．．桜とは少し違う存在．．．

あの純情な桜は今私のここに居るわ」

と俺の手を取り胸に押し当てる。

俺は顔が赤くなるのがわかりバツと手を引いた。

桜「可愛い煉次様」

とクスツと笑う

しかし、その笑みは前までの桜とは違い

とても妖しく

とても綺麗．．．

俺はその姿に見惚れるしかなかった。

桜は．．．いや．．．桜のような人物は

桜「でも私もあの子と同じ名前は嫌ねえ

そうだ！桜花おづかでいいわ」

と自分で命名した。

俺は『桜花・・・』とボソツと言つと

桜花「なんですか？煉次様」

と俺にググつと近づく

俺は一瞬引き

俺「とりあえず皆を助けよう」

と提案すると

桜花「そうね・・・私達の恋路を邪魔するなんて許せないものね」  
と何か言っているが俺は聞かなかつた事にし刀神機を呼んだ。

## 第2部：第5話：『力』

俺は刀神機を呼び

戦線に戻ったが機体の構成はまったく同じだが何か違った。

俺「なにかあるのか？」

と俺が桜・・・いや桜花に聞いた。

桜花「あらよく気付いたわね。ちよつと待ってて」

と言うと俺の前に姿を現し

桜花「先に聞くわよ」

と俺の目を真つ直ぐ見る。

桜花「あなたは力が欲しい？何にも勝り何にも負けない力をあなたは欲しい？」

と聞いてくる俺はコクリと頷く

桜花「そう・・・その為にあなたはとても苦しいわよいいのね？」

と何度も確認をされるが俺はただ頷いた。

『そう』と言って俺の唇に自分の唇を重ねてきた。

すると、俺の力が急に抜け同時に目の前に何かのシステムが次々と現れる。

俺は剣を杖代わりになんとか立ち桜花を見ると

なんと、片方から白い翼が生え

もう片方から黒い翼が生えていた。

そして感情のない言葉で

「血龍システム始動・・・」

と言うと俺の頭の中で

キーン

と頭痛が走った。

頭が割れそうなほどの痛みの中

俺をそっと抱き上げる桜か桜花か分からない存在

そして、その女性が再び俺にキスをする。

しかし、そのキスは一般的に大人がするようなキスで俺は次第に力が抜けていき

頭が真っ白になっていく……だが、俺の体の奥では何か熱い物が湧き上がってくる。

そして、俺はその快感に浸りながら気を失った。

「……ま……れ……ま……れん……さま……れんじさま……煉次様」

と桜の声がする。

俺はその声に導かれるまま目が覚めた。

俺「いつつ……」

と俺の頭にはまだ頭痛が残っている。

桜「大丈夫ですか？煉次様」

と心配そうに聞いてくる

俺「ああ……大丈夫だが……桜……か？」

と不安そうに聞くと『はい』と返事が返って来た。

そして、俺は虚狼牙がどうなったか聞いた。

すると犬神がやってきて

犬神「お前……覚えてないのか？」

と言われたので俺は『ああ』と返事をした。

そして、犬神は今まで起きた出来事を話してくれた。

どうやらあの後俺の刀神機に羽が生え

とんでもない機動力を出し虚狼牙を圧倒したが

しばらくして虚狼牙が退却したらしい。

まあ早い話がいいとこまで行ったが逃げられたと言う事だ。

俺は虚狼牙とかはどうでもいいそれより俺の身に何があったのか知りたかった。

俺は自分が自分でなくなる感じに囚われ怖くなった。そして、俺はダッ！と走った。

特にどこに行こうとも決めていないがただ走った。

もうどれだけ走っただろう・・・

俺は何回もこけたためアチコチに擦り傷が目立つ

しかし、俺は気にする事もせずになだ海を見ていた。

少しして後ろからハアハアと誰かが走ってきた。

俺はそれが誰なのか確認するために後ろを見た・・・

## 第2部：第6話：『涙』

俺が後ろを見るとそこには桜がいた。

桜は胸を抑えハアハアと息を整えようとしている。

そして、俺の横に来て

桜「横座つてもいいですか？」

と聞いてくる。

だが、今の俺は一人になりたいので

俺「駄目だ」

と言いたいがそんな元気もなく心の中でそう言った。

しかし、桜にそんな思いが通じるわけがなく桜は俺の隣に座り俺の顔を心配そうに覗き込むが

俺は顔を俯けた。

桜「煉次様・・・」

と横から泣きそうな声が聞こえるが俺は俯いたままだ。

俺はこのままだと桜に当たってしまいそうなので

俺「もうどっかいけよ・・・」

と軽く言ったが桜は何処かに行く様子もない。

ただ俺の横で俺を心配している。

俺「どっか行けて！」

と遂に怒鳴ってしまった。

俺はハッと自分が最低な事をしたとすぐにわかった。

そして、俺は居づらくなり違う所に行こうとし立ち上がった時

ぎゅう・・・

と後ろから桜が抱きしめた。

桜「私じゃ駄目ですか？」

私が煉次様の傍に居ては駄目なんですか？

私が怖くて何も出来なかった時煉次様は助けてくださいました。そして、今度は煉次様が困っているのに・・・

私では支えになりませんか？そんなに信賴できませんか？

私は・・・煉次様の一体何なんですか？」

と言いい俺の背中で泣き出す。

俺は昔、親父に教わった事を思い出した。

『いいか？もし女が泣き出して止まらなさそうなら口を口で塞げ！いいな？』

それとお前の事だ。お前は誰にも頼らずに生きていくつもりかもしれないがな

余りにも耐えられない時はお前の1番信賴できる奴に支えてもらえそうしないとお前はいつか潰れる。

そして、最後に何事も最後まで諦めるなよ』

と昔、散々親父に教わった。

俺は腹部の所にある桜の手を握り

俺「ごめん・・・ごめんな桜」

と謝った。

そして、俺は桜の方へ向いた。

俺「桜・・・今日だけ・・・今日だけ・・・甘えていいか？」

と聞くと桜は自分の涙を拭き出来るだけの笑顔で

桜「ええ・・・今日だけと言わずいつでも甘えてください」

と言ってくれた。

すると、俺の中で溜まっていた全ての物が込み上がって来た。

そして、桜は俺を抱きしめた。

俺の顔は丁度桜の胸の辺りに来ていた。

丁度俺の顔を隠れるようになり

桜「もう我慢しなくていいんですよ・・・」

と言う桜の一言で俺は泣き出した。

よく考えてみると俺は目の前で友達が死んだ時も美奈子が捕まった

時も

無理をして泣かずに中に溜めていた。

そのせいか俺はただ泣いていた。

桜はそんな俺の頭を優しく撫でていてくれた。

真夜中の海の浜辺で俺と桜は肩を並べていた。

しばらくして俺も泣き止んだ時桜がヘクシヨンと可愛いクシャミをした。

俺はプツと笑ってしまふ桜は恥ずかしそうに俯いている。

俺は立ち上がりパツパツとお尻の砂を叩き落とし桜に

俺「風も冷たくなってきたし戻るか？」

と言って手を差し出した。

桜は『はい！』と嬉しそうに俺の手を掴み立ち上がり

パツパツとお尻の砂を落とし

俺と桜は並んで暗闇の道を歩く

だけど、この海に来る前のような暗い気持ちはもうない

俺は桜を少し見て心の中で（ありがとう）と小さく言った。

そして、俺達は犬神が居るホテルに戻った。

桜と手を繋ぎながら・・・

## 第2部：第7話：『慰め』

俺と桜がホテルに戻ると犬神がいた。

俺「取り乱してすまん」

と正直に謝ると

犬神「いや気にしてないから大丈夫だ」

と言われた。

そして、俺は戦いの途中で現れた青い機体のことを聞いた。

犬神「あいつなら結局通信を無視してどっかに行っちゃった。

それよりサラの部屋に行ってやれ

お前が急に居なくなつて泣き出して部屋に戻った。」

シャルン「煉次ツチ・・・もう一人じゃないんだから

中に押さえ込むのでもいいけど、たまには出しなよ？」

とシャルンに桜と同じ事を言われ俺は

俺「ああ・・・桜にも同じ事を言われた。

これからはそうするよ」

と笑顔で返すと

シャルンも笑顔で『そう・・・なら大丈夫ね！ほら行ってやりなさい』

い

と言われ俺はサラの部屋に向かった。

コンコン・・・

とノックをすると中から

『今マスターは誰とも会いたくないと言っております』

と氷の声がするが

俺「俺だ・・・俺でもだめか？」

と聞くと少しの沈黙の後

『いいでしょう』

と言う声とともにギィッと扉が開く

氷「マスターをお願いします」

と任せ俺は桜に『ここで待ってる』と言い部屋の中に入った。

部屋の中のベットのの上にサラが泣きつかれたのか寝ていた。

俺はサラに近づき顔を見ると顔に涙の筋が残っており泣いていたことがよく分かる

俺はとても申し訳ない気持ちになり

とりあえず、このままだと風邪を引くので俺はサラをお姫様だっこをした。

そして、氷を静かに呼び布団を上げさせ俺はサラを置き氷が布団をかけた。

するとサラは本能的に布団に入ったと分かったのだろうモゾモゾと布団が動き服が次々と出てくる

そして、氷が突然

氷「私は少しの間ロビーに行きますのでマスターをお願いします」と言い残し部屋を出て行った。

俺はサラが寝ているベッドの横に椅子を持ってきて座り

俺「心配かけてすまん」

と小声で言い頬にキスをした。

すると『うゝん』と起きてしまった。

もちろん服を脱いでいるので下着姿のサラが俺の目の前に居る事になる

サラはまだ寝ぼけているのか目を擦りながら俺を見ている

俺は

俺「起こしたかすまん」

と謝ると突然サラが抱きついてきて

サラ「煉次！私心配したんだよ？」

と俺の耳元で囁く

俺「ああみたいだな、すまん

俺はもう大丈夫だ」

と笑顔で言う。『よかった』とサラも笑顔になった。

そして、サラは自分の服装の事に気付き『きゃ!』

と言う可愛らしい声と共に布団の中に入った。

サラ「見た?」

と聞かれ俺は

俺「ああ」

と正直に言った。

サラ「ああ、私なんて恥ずかしい事したんだろう」

と自分の脱ぎ癖を後悔し少しだけでた顔で俺を見た。

俺「もう夜も遅い寝るまで此処にいてやるから寝ろ」

と言うと小声で『煉次が近くにいると恥ずかしくて寝れないよ』と言った。

俺は『何か言ったか?』と聞き取れなかったので聞き返すが『なんでもない』と言い  
布団に顔を隠した。

それから、しばらくの間サラのベットの横で寝るのを待っていた。

## 第2部：第8話：『夢』

しばらくサラを見ていると、いつの間にか俺も寝てしまったようで、気が付くと時計は深夜12時を指していた。

サラは、もうぐっすりと眠っている。

その証拠にス〜ス〜と寝息を立てている。

俺はサラの寝顔を少し見てクスツと、ついつい笑ってしまった。そして、サラに顔を近づけ

俺「おやすみ・・・」

と、囁き髪を少し撫でた。

サラは『ん〜』と嬉しそうな顔をしていた。

俺は（良い夢を見てるんだろうな）と思いながらカチャ・・・

と、静かに扉を開きパチン

と、電子音と共にサラの部屋は暗闇に優しく包まれた。

そして、俺は部屋から出て開いた時と同じようにゆっくりと、閉じた。

部屋を出ると、そこには桜が椅子に寝ていた。

俺は『やれやれ』と、少しため息をつき

俺「ここで寝ると風邪ひくぞ」

と、忠告するが起きるはずもなく

俺は『よつと』と、掛け声のような物を出しながら桜をおぶった。

そして、部屋に戻りにベットへゆっくり降り降ろした。

俺は、そのまま部屋を出ようとするが突然、手を掴まれた。

後ろを見ると桜が涙を流しながら俺の手を掴んでいる。

俺は手を離そうとした時、『いけないで・・・』と、寝言を言った。

ただの寝言と言えば、それで終わりだが桜は涙を流していて、そう言われると何だか少し可哀想に思い。

俺も、もう寝ることにした。

布団に入り掴まれていない方の手で桜の頭を撫でる。

俺「どこにも行かねえよ」

と、囁くと少し笑顔になった。

俺は、寝る前に時計をセットして目を閉じた。

暗闇の世界・・・

その中に、ポツリと一人だけいる幼い頃の俺

何があつたのか分からないが、泣いている。

その自分を見ていると、自分の中に悲しいと言う感情が流れ込む。

しかし、その俺を泣き止ませようとする人間が二人・・・

一人は幼馴染の女の子・・・

もう一人は着物姿の女の子・・・

だが、幼馴染の女の子の目から光が消え

その女の子が、どんどん遠くに行ってしまう。

俺は、追いかけるが距離が縮まる所か、離れていく

そして、女の子は暗闇の中に消えた。

俺は、ただ泣いていた。

そんな俺を、優しく抱いてくれる着物の女の子

女の子は、俺を抱きしめたまま俺の名前を繰り返し呼ぶ・・・

煉次様・・・

煉次様・・・

煉次様・・・

その声は、段々現実でも聞こえるようになってくる。

『煉次様・・・煉次様・・・』

気が付くと俺の目の前には桜がいた。

夢の中の幼い頃の桜と重なる。

桜「煉次様・・・大丈夫ですか？うなされていましたよ」

と、桜が少し心配そうに聞く

俺「ああ・・・もう大丈夫だ・・・もう・・・大丈夫」

まるで自分に言い聞かせるように言い桜を抱きしめた。

そして、桜と目線が合い

そのまま、顔と顔が少しずつ近付き唇を重ねた。

少しの間、桜と俺は唇を重ね続け、突然時計のアラームを鳴り出す。

俺と桜は驚き顔を離す。

しかし、アラームと気が付き俺と桜は『プツアハハ!』と、笑い出す。

一通り笑った後、俺と桜は昨日お風呂に入っていない事に気付き温泉に入る事にした。

## 第2部：第9話：『温泉』

俺と桜は、着替えを持ち風呂場へ向かった。  
途中でシャルンとサラと氷に会った。

そんな事で・・・

俺「なんだ・・・この比率・・・」

男一人に女が4人

どうやら犬神は忙しいらしい・・・

俺「とりあえず入るか？」

と、【男湯】【女湯】と書いてある入り口の前で別れる。

俺は、中に入りちゃっちゃと脱ぎ腰にタオルを巻き中に入る。

そして、誰もいない風呂場を見て

俺「やっぱり朝風呂は誰もいなくていいなあ」

と、軽く感動して風呂に入る。

俺がゆっくり風呂に入っていると向こうから団体か4人の影が見えるが

湯煙で姿までは確認できない。

その、人影が俺の近くまで来て

『失礼します』

と言う、その声は聞き覚えがある声で俺は目を細め、その人間をみた。

すると、その人は桜だった。

俺「な！なんで！桜がここにいるんだ！」

と俺が言うとうとうも気付いた様で

桜「え？煉次様？」

と驚いていた。

俺と桜は同時に

『え？だって入り口は・・・』

と入り口を指差した。

すると、入り口が二つある・・・

そして、俺と桜が同時に

『混浴?!』

と、言った。

とりあえず、今この場所に男は俺しかいない事もあり

俺「俺が上がるよ」

と上がるうとした時、

サラ「いいじゃん!一緒に入ろうよ!」

と俺を止める。

桜「そうですね。入りましょう煉次様」

と最終的に俺が説得され一緒に入る事になった。

サラと桜はタオルを巻いているのでいいが・・・

俺「おい・・・氷とシャルンをなんとかしてくれ」

と、二人を見ると幼い事もあり胸も何もないが一応女

俺もそんな姿を長時間見たいわけじゃない

シャルン「ああ」よくじょう”してるの?」

とわざとらしく欲情を強調する。

氷は顔を赤らめ『ダメですよ』と言う。

俺は呆れ『はあ』と溜め息を出す。

すると、桜が

桜「煉次様は幼い感じの方が好みなんですか?」

と真顔で迫りながら聞いて来る。

サラも興味津々と言った感じだ。

俺「俺は普通の男だよ。

胸も大きいのが好きだしな・・・」

と、自分の言っている事を恥じながら告白した。

すると、サラと桜は胸を隠していたタオルを少し取り胸を確認している。

俺（見えてる・・・見えてるって!）

と心の中で叫ぶ。

俺はこのままだと確実にのぼせると思い上がる事を決意した。  
その時……

ふによん……と、右腕に柔らかい感触が当たった。  
俺が横を見るとサラが俺の右腕にしがみ付いていた。  
すると、今度は左腕に柔らかい感触が当たり。

今度は桜が左腕にしがみ付いていた。

俺は心の中で

（胸が当たってる！当たってるって！）

と、叫びただ俯いた。

桜「煉次様……今とてもドキドキしていますね？」

と桜に言われ俺はビクツとした。

サラ「緊張してるの？体堅いよ」

と言われ更に驚く。

俺（これは……生き地獄だ……）

と、言うしかない

右には大体Dほどのサラが

左にはEかFはある桜の胸が当たっているのだ。

ある意味耐えるという方が酷であり、俺は次第に意識が遠のいて行った。

ブクブクブク……

と、俺が沈んでいき。

そして、桜とサラが驚きながら俺を助けようとしていた中、

俺は、最後にサラと桜の胸を直に見てしまい遂に鼻血を出してしまった。

## 第2部：第10話：『新しい仕事』

気が付くと俺は、ホテルのベッドで鼻にティッシュを詰め込んで、横になっていた。

俺は、鼻からティッシュを抜いた。

ティッシュは血で赤く染まっていた。

そして、俺は目を閉じさっきの光景を思い浮かべた。

すると、タラリとまた鼻血が出てきた。

俺は必死にその光景を払拭し、忘れる事にした。

とりあえず、俺はホテルのロビーに向かった。

ロビーには荷物をまとめ、ホテルを出る準備を終らせて待っている皆がいた。

俺は皆のところに行き桜の横に座る。

俺「俺の分も用意してくれたのか？」

桜「はい」

俺「そうか、ありがとうな」

と桜に笑顔で礼を言う。

すると、犬神が立ち

犬神「さて全員揃った所でホテルを出るか、おつとその前に次の目的地だが、第二ニューヨークになった。

理由は簡単だ。煉次、お前の両親がそこに行くから護衛を頼むとメルが来た。

もちろん、賞金もでるようだしな。」

と、説明された。

俺は断る必要もないので

俺「わかった」

と、言った。

こうして、次にする事と目的地が決まった。

俺達は、一度東京へ向かい、両親と合流し再び移動し始めた。  
俺「そういえば、何で『第二』なんだ？」

と刀神機の中で桜に聞く

桜「元々あったニューヨークは戦争などで壊滅したそうです。  
その上その場所の地形が変わってしまい今は海になっているよう  
です。」

そこで、新しくニューヨークを作ろうという事で第二ニューヨーク  
を作ったそうです。

さすがに最近出来ただけはあり、欧米としては最新式の機械などを  
使っており

今は大きな都市になっているようです。」

と、桜が情報を検索し俺に細かく教えてくれた。

俺は『へえ』としか、言えなかった。

少しの間、沈黙が続き俺が耐えかねて

俺「そういえば、今日の温泉入れなかったな・・・」

桜、今度何処かの温泉行くか？」

と聞くと少し驚いたのか

桜「え？え？いいんですか？」

と何度か俺に聞いていた。

俺は『ああいいに決まってるだろ』と言い返すと

桜「えっと、日本の温泉なら何処でもいい感じですね」

あ！この温泉、混浴可ですって！一緒に入りましょう！」

と急に元気になり、俺の目の前に温泉の紹介用HPが次々現れる。

すると、横から

犬神「確かに、日本の温泉は何だか趣きもあり、ゆっくり出来る所  
ばかりだぞ。」

俺も良く流銀隊長と行ったものだ。」

と、まるで過去を振り返る様に通信が入った。

サラ「桜！私も行くわよ！」

と、今度はサラが『2人で行かせるもんですか！』と、割って入ってきた。

俺の目の前では、様々な画面が広がっていた。

俺は横を見た。

すると、一面に青い水が広がっていた。

俺は、『これが海か！何度見ても感動するなあ』と、感動しながら外を眺めていた。

そして、俺達を守る、俺の両親が乗った飛行機も俺達の横にいた。

## 第2部：第11話：『守るべきモノ』

俺が飛行機を見ていると突然、  
ピピ！

と電子音がし

桜「敵機確認

数約100・・・いえ200」

と、言われ俺はレーダーを見る。

すると、そこには赤い丸が前方にたくさんあった。

犬神「来やがったぜ！政府の連中だ！」

と、犬神が通信を入れてくる。

そして、俺達は飛行機を守る為に戦闘を開始した。

まずは俺達の機体が早いという事でまずは先に行き殲滅する。

俺はブーストをオンにし相手のど真ん中で止まる。

周りの360°。全てを敵に囲まれる。

敵はここぞと言わんばかりに次々に撃ってくる。

俺と桜はただ避けつつけた。

俺「くっ！左前方シールド

右後ろシールド！」

と、俺は避けきれない攻撃を魔力のバリアで防ぐために桜に指示を与える。

俺が、避ければ俺の後ろの敵が流れ弾に当たり潰れた。

桜「敵、残存数残り100」

と、桜が残りの敵を教えてくれる。

俺は刀を構え、『それじゃあそろそろ行きますか！』と意気込む  
が！次の瞬間  
ピピ！

桜「後方より敵確認

数200・・・300・・・なおも増大中」

と、リーダーに次々と赤い丸が増える。

俺「つく！とりあえず此处を片付けるぞ！」

と、言い次々切り倒して行く、そして全ての敵を倒し飛行機の所へ戻ると犬神達が戦っていた。

犬神「我が呼ぶは風の刃！【エア・スラスト】！」

サラ「岩石達よ我の声に答えよ！【ロックブレイク】！」

と、言うとき犬神からは白い風の刃がサラの下からは岩石が現れ、敵に襲い掛かった。

犬神「つち！倒しても倒してもキリがねえ」

サラ「こつちもそろそろ限界！一体何体いるの？」

と、苦戦しているようだ。

俺「すまん！」

と、そこへ俺がやつと着いた。

犬神「煉次！もう少しで飛行機は目的地に着く！それまで守ってくれ！」

と、言われ俺は『わかった』と返事を素早く飛行機の近くへ行つた。

そして、俺は詠唱を始めた。

俺「我が呼ぶは炎の盾、燃えさかる業火の盾は襲い来る者に牙を向き全てを無に返す！」

【ファイヤーウォール】！」

と、言うとき血龍刃と飛行機の周りに赤い膜が覆った。

そして、襲ってくる敵の弾や武器がその膜に当たっては弾かれたり、じゅう、と言う音と共に消えたりした。

しかし、こう言った魔法は発動より維持に魔力がかかり、俺「つく・・・」

と、俺は膝を付く、桜は心配そうな顔をするが、

桜「目的地まで残り1km」

と、残りの距離を覚えてくれる。

俺は、汗をタラリと流しながら、ハアハアと剣を杖代わりに立つの

がやつとの状況で、

維持の為に使う魔力の性で何だか力が抜けていく感じに襲われ始めた。

桜「残り200m」

と、残りを教えてくれるが俺にとっては正直とても長く感じた。

残り150

俺はドンドン力が抜けていき刀を握る力も失いそうになる。

残り100

俺の視界はゆがみ始め全てがスローモーションのように見え始めた。

残り50

遂に俺の視界が暗闇に包まれ始め、刀を握る力を失い倒れ始める。

残り10

維持できなくなった、魔力の壁はガラスのようにヒビが行き崩れた。そして、ダーン！と銃の発砲音が最後に聞こえ、俺の意識が途切れた・・・

## 第2部：第12話：『龍次』

ドクン・・・ドクン・・・

暗闇の中に居る・・・

その暗闇の中、横たわる俺、その横たわる俺を見るもう一人の俺・・・

『またか・・・お前の体は俺の体だ。』

そう易々とやられたら、こっちがたまんねんだよ』

と俺を見ながら言う。

俺「誰だ・・・」

と聞くと

『龍次だ。お前の闇の部分とでも言っておこうか』

と自分の事を言い消えた。

そして、俺は俺の体でなくなった・・・

暗闇から見える俺の体。

銃弾は真っ直ぐ刀神機の中核へ向かってくるが

スカ・・・と音のような物がした瞬間銃弾は粉々になった。

そして、俺の体が

『さあて、ちゃっちやと終らせるか』

と言う。

もちろん、俺ではない・・・

龍次だ・・・

龍次「システムメニューオープン

全てのシステムを俺へ」

と自分にシステムを持ってきた。

桜はどうやら俺と同じで気を失っているようだ。

そして、恐るべき事が起きた。

機体がとんでもないスピードで動き出した。

あまりの速さに消えたように見える。

そして、詠唱が鳴り響く

『我が呼ぶは、獄閻の炎！炎は罪と罰を繰り返す度に巨大になり、善なる存在を焼き払う！』

私の炎から逃れる術はなし！【黒焰龍】！』

と言うと俺の技に似て、剣に炎が纏わりつく。

しかし、圧倒的に違うのは・・・

炎が黒い事・・・

俺の炎は断罪の赤き炎、

では龍次の炎は例えるなら、善を裁く闇の炎・・・

龍次「くくく・・・謝ってもゆるさねえぜ・・・

苦しみながらあの世で悔いな！」

と言うと剣を振る。

すると、黒い炎は敵に広がって敵を覆いこむ。

敵機は黒い炎に少しずつ包まれていく。

恐らく何かの衝撃でオープン通信が開かれたのだろう

『やめろ・・・やめてくれ！暗闇が・・・暗闇がくる・・・

うわあああ~~~~~!!!!!!』

と断末魔が聞こえ、敵機が爆発した。

龍次「くくく・・・いいねえ・・・最後の懇願何とも惨めだったな・・・

・・・」

俺は龍次を見ているとなんだか意識が暗闇に包まれていく・・・

あれが・・・俺の闇の部分・・・

今まで抑えていた影の部分・・・

闇は抑える様とすればするほど肥大化していく・・・

俺がもう無理だと諦め様とした時、

『甘えてください』

と、桜の声が聞こえた。

そうだ、俺はもう一人じゃない。

桜がいる。

犬神がいる。

サラがいる。

俺はもう一人じゃない。

そう思ったとき光が見えた。

小さな光は次第に大きくなって行き俺は意識を回復させる。

そこは見たことのない天上だった・・・

俺「ここは・・・」

と横を見ると、そこには桜が眠っていた。

俺「そうか・・・無事・・・なんだな」

と俺は自分の手を何度も握る。

よく周りを見るとどうやらホテルのようで外も夜と言う事で俺はもう一眠りする事にした。

しかし、桜が寝ぼけているのか突然俺の布団に潜り込んできた。

最初は怒ろうかと思ったが、今日の事を思い出し止めた。

結局俺は、桜と一緒に寝た。

桜が近くにいたおかげか、夢の中で俺はとても暖かい中に居た気がした。

## 第2部：第13話：『平和な日』

・・・様・・・煉次様

と女性の声がして俺は目が覚める。

桜「おはようございます煉次様」

と満面の笑顔で挨拶をしてくれた。

俺はこの瞬間（ああ今日もいい日になりそうだな）と思った。

二人で少しの間会話を楽しんでいると、

コンコン・・・

と、ノックの音がした。

俺「はい」

と言うとガチャリと開く、そこにはサラの姿があった。

サラ「おはよう、今日は犬神が煉次の両親と研究所に言ったから一日自由時間だつて」

と、今日は好きに行動していいことをまず教えてくれた。

そして、続けて

サラ「それでね？良かったら今日は一緒に買い物に行きたいなあと思つて」

と、買い物に誘ってきた。

俺は自分の中のもう一人の存在をしり、一人で考えたかったが一人でいると逆に滅入つてしまいそうなので行く事にした。

桜も俺が行くと知ると『それじゃあ私も』と言う事で、

俺、サラ、桜、氷の4人で買い物に向かった。

俺達がホテルを出ると眩しさに目を細めてしまう。

眩しさに慣れてきて目を開くと俺は自然と

俺「すげえ」

と声を出してしまった。

目の前には高い建物がズラリと並び

人通りは多く、地面、空中共に車が大量に走っている。まさに大都会と言った感じである。

俺はついついキョロキョロと周りを見渡してしまう。

桜「そんなに珍しいですか？」

と桜が話し掛けてきた。

俺「ああ・・・俺のいた所とは賑やかさが全然違うし、店もたくさんあるし

何もかもがすげえとしか言えねえよ」

と率直な感想を述べた。

俺はサラに連れられ服屋に足を運んだ。

俺はとりあえずサラ達が服を選び終わるのを待った。

その時、俺は始めて着物姿じゃない桜を見た。

ワンピースなど様々な服を着る。

サラと氷も同じように様々な服を着る。

試着しては俺に感想を聞く、

俺は素直に似合う物は似合う、似合わない物は似合わないと言った。

結局一時間かけて服を選び、女性たちは下着を買いに行った。

俺は流石にそこまで行きたくないの自分でいいなあと思った服を選び試着する。

俺がこの店で一番気に入った服を試着して外に出ると丁度桜がいて桜「とってもカッコいいですよ」

と笑顔で言ってくれた。

どうやら女性達は下着を買い終わったらしく買い物袋が増えていた。

俺も服を数着買い、女性達の方も荷物を持ち違う店にいった。

次の店は水着などが売っているスポーツ用品店。

皆、水着を買いに来たのだ。

今回は女性達は『泳ぎに行くまで秘密』と言い残し買いに言った。

仕方なく俺は一人で水着を選んでいた。

結局すぐに決まってしまい、残りの時間は椅子に座ってのんびりと

コーヒーを飲んでいた。

そして、コーヒーを飲みながら外を見る。

目の前を車が行き来しており下を見れば人がとても小さく見えた。しばらく、そうしていると女性組が楽しそうな会話をしながら戻ってきた。

俺は立ち上がり再び荷物を持つ。

そして、もう昼と言う事で昼食を取ることにした。

近くのオープンカフェに行き注文をした。

俺「カフェオレとタマゴサンド」

桜「同じ物を」

サラ「チヨコレートパフェ！」

氷「私もチヨコレートパフェを」

と皆思い思いの物を頼み、

会話を楽しみながら昼食を取ることにした。

俺はこんな平和な日がいっまでも続けばいいなあと思った。

## 第2部：第14話：『研究所』

昼御飯を食べ終ると犬神から電話があつた。

内容は・・・

『研究の事で集まって欲しい』

との事だ。

俺達は近くで車を拾い、まずホテルへ向かった。

ホテルに荷物を置き入り口に降りると、

そこには、犬神がいた。

俺達は研究所への行き方を知らないので迎えに来てもらったのだ。

犬神「すまん、今日はゆっくり過ごし貰おうと思ったんだが・・・」

俺「構わないさ。お陰で悩み事も吹っ飛んだしな、それに平和の大切さも再確認できたし」

と、言うとき犬神は『そうか』と言って歩き出した。

犬神「こつちだ。行くぞ」

と、言つて外へ出た。

そこには車があり、犬神が運転席に座つた。

俺達は少し疑いの目で見てみると、

犬神「なんだよ・・・その目・・・大丈夫だって！ほら！免許ももってるだろ？」

と、言われ俺達は渋々乗つた。

刀神機に乗っている犬神を見ると、どうも荒々しい運転しか想像できなかつた。

そして、事実今もこうして生命の危険を感じていた・・・

俺「速い・・・速いって！」

桜「犬神様・・・少しスピードを出しすぎでは？」

と俺達が止める中・・・

サラ「うわゝ速い速い！」

と一人だけ興奮をしていた。

周りの風景は速すぎて見る事も出来なかった。

そんな車に乗る事数十分・・・

犬神「ここだ・・・」

と目の前には大きなビルがあった。

しかし俺は・・・

俺「気持ち悪・・・」

と車の近くで座りこんでいた。

桜「大丈夫ですか？」

と桜が俺の背中を優しく、さすってくれていた。

氷とサラは先に中に入った。

俺は犬神に連れられて取り合えずビルに入った。

入ってまずは、研究室に行かず休憩部屋に行き

飲み物を飲みながらゆっくりとしていた。

少ししてから随分、気分が良くなり

俺は立ち上がり

俺「桜、心配かけてすまん」

と一度謝ってから『それじゃあ行こう』と言って部屋をでた。

そして、犬神から貰った研究所へ行くためのメモを見ながら歩いて行った。

しばらく、メモの通り歩きやっとな、メモの最後に書いてあるエレベーターに乗る事ができた。

やけに長いエレベーターがやっと泊まり扉が開くと

そこには、様々なコンピュータや機械などが沢山ある場所に着いた。

俺と桜が周りをキョロキョロと見てみると犬神が俺達を見つけたのか、

犬神「おい、こっちだ。」  
と、大声をだし手招きをしていた。

## 第2部：第15話：『洗脳』

研究所に着いてからは暇ばかりだ。

俺の母さん達が刀神機の動力源の・・・確か・・・

P-LINKシステムとか何とか言っていたような・・・

とりあえず、そんな専門用語ばかりで俺と桜は、

実験・・・実験・・・実験・・・実験・・・

俺「だあゝゝゝ！！！！もう！」

遂に切れた・・・その時、

遥「煉次、もういいわよ。

桜ちゃんと上でイチヤイチャしてなさい」

と満面の笑顔で俺に言っつて桜の方へ行く。

俺はワナワナと拳が震えていたがすぐに収まり、

俺「やつぱり、母さんには勝てないか・・・」

とぼやいた。

その頃、母さんは桜に『息子をよろしくね』と言っていたらしい・・・

その頃、犬神は流銀に連絡を取り今日、会う事になっているので少し違う場所に行った。

犬神は待ち合わせをした森に着いた。

すると、流銀は既にいたので

犬神「お久しぶりです。流銀隊長。

待てせてしまいましたか？」

と挨拶をした。

その瞬間・・・

キィィィン

と犬神の頭の中で変な音が鳴り響いた。

犬神「う．．．うがぁゝゝ！！！」

と相当、痛いのか犬神は地面を何度も転がったりしている。

その様子を見ている流銀．．．

いや．．．もしかすると少し笑っていたかもしれない．．．

犬神「ウワアゝゝ！！あがぁあアア！．．．」

と遂には口から泡を吹き出し始めた．．．

そして、犬神は最後の力を振り絞り、こう言った．．．

犬神「隊長．．．グウ．．．まさか．．．洗脳．．．され．．．」

最後の言葉を言う前に流銀は『堕ちる．．．』と言った。

すると、犬神は『ウワアア』と一際大きく叫び、ガクンと力を無くした。

そして、少し時間が経ってからムクリと起き上がり

犬神「．．．命令を．．．」

と、何の感情も込めず、強弱すらなく、ただ言った．．．

その時、雨も振っていないのに雷が落ち流銀と犬神の目は光を失っていた．．．

そして．．．それは悲劇という運命の始まりだった．．．

## 第2部：第16話：『激戦』

俺と桜が二人でのんびりしていると、犬神からメールが入った。  
内容は

『少し用事がある。添付してある地図を見て来てくれ』  
と添付ファイルがあつた。

俺はなんだか嫌な予感がし、

俺「桜、先にホテルに戻っててくれ」  
と桜をホテルへ帰した。

俺は、添付された地図を見ながら犬神が来いと言っていた場所へ向かった。

地図を見ながら歩き待ち合わせの場所が見えてくると、そこには刀を抜いた犬神が静かに立っていた。そして、俺を一見し俺だと確認すると、突然襲いかかってきた。

ガギン！

と俺は、とつさに刀を抜き防御した。

俺「な！何しやる！」

と驚きながら犬神にそう叫んだ。

しかし、犬神はただうわ言の様に『殺す…殺す…』と何度も繰り返して呟く…

その時、雷鳴が鳴り響き一瞬だけ犬神の顔を見る事が出来た。

犬神の目には光が無く、虚ろな目をしていた。

その時、俺は洗脳された事を知った…

だが、犬神の手は休む事無く俺を攻撃してくる。

犬神「何故反撃しない？…まだ憎しみが足りないか…」

と言って手を掲げると刀機達が姿を現し町を襲い始めた。

俺「やめろ！目を覚ませ！」

と防御をしながら必死に叫ぶ…

しかし、声は届かずしばらく攻防を繰り返していると…

ガサガサ…

と音がした。

俺と犬神はほぼ同時に視線をそちらへやった。  
そこに居たのは…

『煉次様…？』

桜だった…

それを見た犬神はニヤリと笑い桜に襲いかかる。

俺は桜の正面に立ち、

ガギン

と剣を受ける…

俺「そうかよ…なら…やってやるぜ！」

と言って俺は受けている剣ごと犬神を吹き飛ばした。

俺「桜…すまないが母さん達の様子を見てきてくれ…」

と頼む少し不安そうだったが

俺「大丈夫だ！いざとなったらこの剣で桜を呼ぶからよ…」

と言うとコクリと頷きタツタツと走っていった。

そして、俺は犬神の方を向き

俺「さて…勝負をするか…」

と言って俺は力チャリと剣をしっかり構えた。

しばらくの沈黙が続く…

俺「うおおー」

犬神「せえーい」

と同時に攻撃を開始した。

ガギン！ギン！カン！

と攻撃をしては防御をし、また攻撃をしては防御を繰り返した。  
まさに力の差はほぼ無く五分と五分と言った感じだ。

俺と犬神は距離をとる事無く、常に近距離で勝負をしていた。  
段々剣筋が速くなっていき…

ガガガガガ…

とほぼ連続で音がするようになった。

空では雲が時にゴロゴロと唸り

一瞬白くなつてはまたゴロゴロと唸りを上げる・・・

そして、ポタ…ポタ…と雨が降り出しすぐにザーっという音へかわつていった。

そんな雨も気にしないで俺と犬神は戦っていた…

俺達は雨を気にする余裕など無いのだ・・・

一瞬でも隙を見せれば…

死がまっているから……

## 第2部：第17話：『続・激戦』

ザー

と雨は止む気配もなく振り続ける。

その中、俺と犬神はジリジリと近付き相手の動きを見ていた。

そして、

シュッパ

と音がすると俺と犬神の位置は正反対の場所に移動し衣服が少し切れていた。

俺（このままじゃ勝負がつかない…）

と判断し俺は犬神に近付いた。

すると、予想通り剣が動きだす。

俺は一気にスピードを上げ懐に潜った。

そして、剣を振った。

サク…

と音がして俺と犬神は後ろに下がる。

犬神は横腹から血が流れ、俺は足から血が流れていた。

犬神は受ける瞬間に俺に切りかかったのだ。

そして、俺が前を見ると犬神が突っ込んで来ていた。

俺は体を捻り辛うじて避けたが…犬神は上を脱ぎ俺の首を絞めてきた。

俺は『グウ…』と唸りながらもいた。

そして、俺はとっさに剣の鞘を後ろに突きだした。

すると、丁度溝に入り相手の絞めが一瞬ゆるんだ。

その瞬間に犬神を蹴り飛ばした。

俺は『ゲホゲホ』と少し咳をだして犬神を見た。

犬神はゆっくりと立ち上がり落ちた剣を握って俺を見た。

俺も剣を構え目の前にいる人間を完全に敵と思い始めた…

俺は雨でビショビショになっているが関係ない…いや、濡れている

こと事態、気付いていない様子で戦っている。

ガキン！ギギギ…

と剣と剣を合わせ同時に右で殴る。

ドゴオと鈍い音と共にズザザアと後ろへ吹き飛び、『ペッ』と口の中の血を吐きだす。

雨は激しさを増し更に強く打ち付ける。

まるで、俺達に無視されているのを怒るかのように…

しかし、俺達にそんな事は関係ない…

今、見えるのは相手だけ…

そして頭の中には『勝つ』の二文字だけ…

二人はただ、今出せる力を全て出して戦っている。

ザク！

と犬神の肩に剣が深く入る。

しかし、犬神は距離を離し、衣服を破り傷口を塞ぐ。

全く無駄のない両者の動き…これが生死を賭けた本当の戦いなのだろう…

## 第2部：第18話：『激戦の行方』

ギーン！ザク！

と剣を受けては攻撃をする。

それを繰り返し両方とも体中が傷だらけになっていた…

ハアハアハア…

と二人共、もう体力が尽きかけている。

スウ…

と深呼吸をして同時に相手を見る。

両方共、もう体力はない…

これが恐らく両者の最後の攻防…

カチャリ…

と同時に剣を強く握る。

そして、両者動かなくなった…

雨はもう降っておらず、風が少し吹いていた。

サア…と周りの木々が『早く！早く！』とまるで決着を見たいように揺れ動く…

しかし、俺と犬神は動かずに…

ジリジリ…

と少しずつ進んで行く…

そして、ある一定の距離につきピタリと止まった。

その距離は両者の剣が届く距離…

勝負は一瞬…いや…もっと早い瞬間に決まる。

俺も犬神も全神経を研ぎ澄ませる。

遂に…決着の一閃が始まった。

開始の合図は丁度さつき揺れた木が落とした一枚の葉…

丁度、俺と犬神の視界に入ってきた。

そして、両者の目が葉で隠れた瞬間から全ての映像がスローになる…

俺と犬神は同時に一步を踏み出す。

その一步を軸に一気に加速する…

両者、自分の気持ちの全てを剣に込め…遂に…

ギィィィィン！

と片方の剣が遠くに弾き飛ばされた…

そして、その剣の持ち主はゆっくりと倒れる…

バタン…

そつ音がして横になる人間…その人間から赤い水が楕円形に広がって行く…

ヒュンヒュン！ザク！

と飛んでいった剣が持ち主の顔の真横に突き刺さった…

ついに…決闘は幕を閉じた…

丁度その時、草むらの向こうから桜がやってきた…

そして、桜は決着の結果を目の当たりにした…

最後に勝ったのは……

第2部：第19話 『勝者…敗者…』

激戦を制した者…その名は…

桜「いや…ウソでしょ…いや…いや…イヤアアアア！」

犬神…

犬神はまだ辛うじて息がある俺に近づき剣を突き刺した…

ズブウ！

と音がし俺の体を剣が突き抜け地面に刺さる…

犬神は満足そうな顔をし、その場を後にした…

桜は完全に壊れてしまった…

俺の頭を抱き締め、イヤア！と叫びながら泣きつづける…

その叫びが聞こえたのかサラと氷が駆けつけた…

両方とも一瞬で状況がわかったようだった…

サラ「そんな…」

とペタンと座りこみポロポロと無言で涙をこぼしだした…

そして、桜は氷を見て…

桜「氷！お願い！今すぐ！今すぐ煉次様を氷漬けにして！」

と言い出す桜…

氷は戸惑いながらも俺を氷漬けにした…

桜「私が生きてるって事は、まだ煉次様が生きている証…」

そう言つて桜はゆっくりと氷ごと俺を抱き締めた…

桜「私は煉次様を助きたい…その為なら何だってする…」

そう呟くと桜の体が光りだす…

氷「桜さん！それは！」

と止めようとするが…

桜「来ないで！煉次様は…私の全て…煉次様の居ない世界なんて…あつて無いような物…」

と氷を近づけなかった…

そして…俺は光の玉となつて桜の中に入った…

桜「少しの間…ここにいてください…」

と胸に手を当て、呟いた。

氷「あなたは…そこまで煉次さんを…」

桜「私は…神々の知識があると言われる聖域の図書館を探すわ…」  
と言つて歩き出す…

サラ「そこに…煉次を行き返らせる方法があるのね？」

桜「ええ…恐らく…」

サラ「ならついて行くわ…私も煉次を助きたいから…」

氷「サラ様…分かりました…行きましょう！」

と三人は聖域の図書館を探す事にした。

その前に煉次の両親が無事かを確かめるために町へ向かった。

町は炎に包まれ、叫び声や泣き声がそこら中から聞こえる中、

煉次の両親は研究所の前で研究員達と話していた…

どうやら無事のような…

まずはどんな小さな情報でもいいので煉次の両親に聖域の図書館について聞いて見る事にした…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1494a/>

---

神々の御剣

2010年12月3日15時13分発行